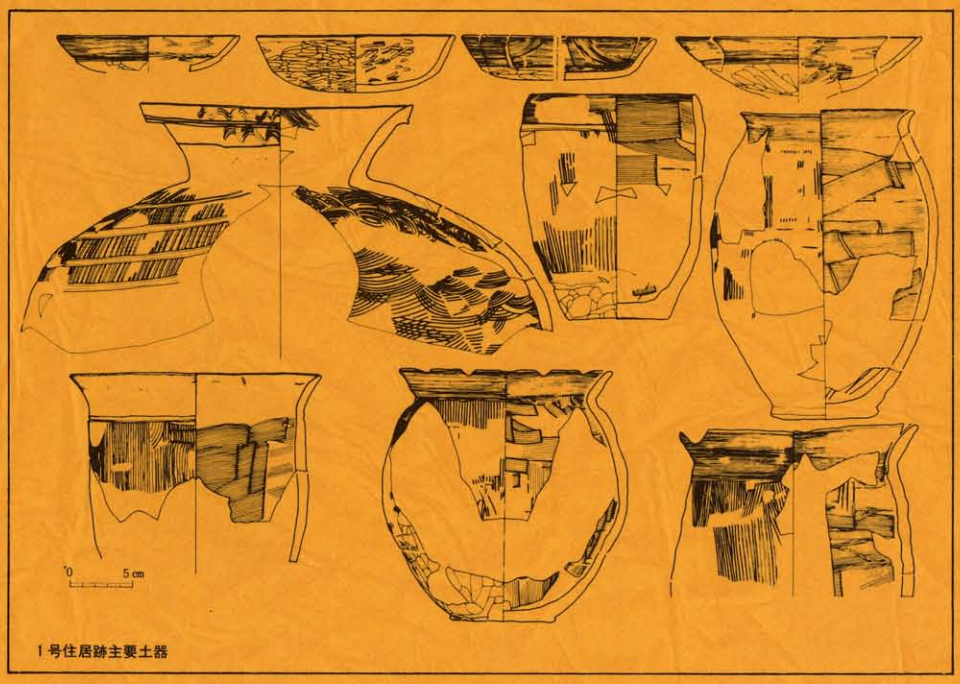
仙台市文化財調査報告書第72集

六反田遺跡Ⅱ

立地：名取川の自然堤防上
内容：縄文時代後期の遺物
　　奈良時代の竪穴住居跡
　　平安時代の水田跡



1号住居跡主要土器

1984年3月
仙台市教育委員会

『仙台市文化財調査報告書第72集六反田遺跡Ⅱ』正誤表

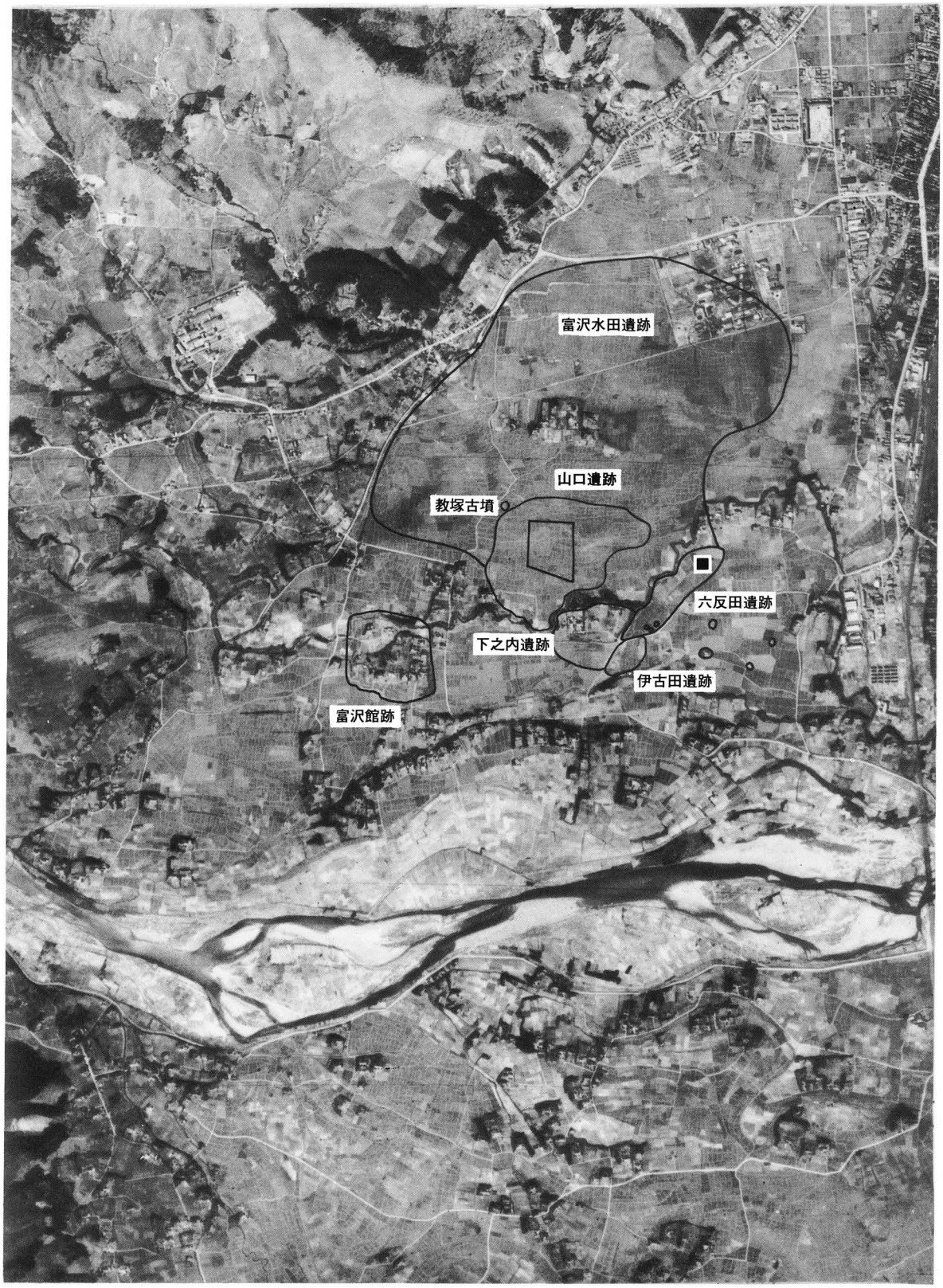
ページ	行　　目	誤	正
	報告書作成要項	須江敏	諏江敏
	調　査　要　項	須江敏	諏江敏
1	上から４行目	検出され沖積平野	検出され宮城県内沖積平野
4	第　2　図	六反田遺跡の番号21を１に訂正	
9	第　4　図	水系レベル標高10.650m	
20	第　11　図	第１号住居跡周溝断面は48ページ第20図参照	
23	第　4　表	ピット20の堆積土番号１２３４５６→４５６１２３	
		ピット23堆積土　暗褐色10ＹＲ¾シルト質粘土	
		ピット７・８・21・24は欠番	
39	第　5　表	※６は欠番	（削除）
48	第　20　図	イロ及びハ（原図位置ヌケ）層は第１号住居跡周溝堆積土	

仙台市文化財調査報告書第72集

六反田遺跡Ⅱ

立地：名取川の自然堤防上
内容：縄文時代後期の遺物
　　奈良時代の竪穴住居跡
　　平安時代の水田跡

１９８４年3月
仙台市教育委員会



六反田遺跡周辺の航空写真　■調査区　□山口遺跡1981・2年調査区　○古墳

昭和20年米軍撮影　国土地理院 1：25000

序　　文

仙台市西南部、名取川北岸には、太白山北麓を巻き込むように流れくる笊川があって名取川本流と競合しながら、流域には無数の自然堤防を形成している。現在の西多賀、富沢地区は殆んどこの堤防上にある。この地区に考古学上の研究の手が施されるに至ったのは最近になってからのことである。

昭和51年から開始されたこの地区の大規模な発掘調査は、これまでの考古学研究に、数多くの問題提言を投石している。中世・平安・弥生時代の水田の発見、縄文後期前葉の集落の発見、縄文時代後期中葉頃のまとまった遺物包含層の検出、奈良～平安時代の集落の発見等々が重層構造を成して、それぞれ営まれていることなどは、沖積地に挑む考古学研究に新な知見が加えられているところとして著名化しつつある。

この六反田遺跡の発掘調査は、仙台市立大野田小学校の増改築に伴う事前の記録保存を前提とした調査である。調査の結果、縄文時代後期の遺物、奈良時代の竪穴住居跡、平安時代の水田跡など重層構造をもって発見された。なかでも奈良時代の住居跡は、仙台市郡山遺跡、栗原郡高清水町観音沢遺跡、同郡築館町佐内屋敷遺跡、志波姫町御駒堂遺跡等で検証されている住居跡で、七世紀末～八世紀前半の集落と遺物を考える上で特筆すべき重要な発見である。

本書はそうした成果を、全県的な発見例をも検討し集成した報告書である。

文化財は、先人が時を越えて現地に印した、かけがえのない遺産であり、歴史的資源である。これを、しっかり受けとめ、後世永く継承することは、文化財行政にとって重大な課題であると考えている。それにも増して、市民の絶大な御理解と御助言は、行政執行上、多大の影響があることを思う時市民各位の一層の御協力を御願いして序とする次第である。

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

報告書作成要項

1．本書は、仙台市大野田字六反田（ろくたんだ）10番５号、仙台市立大野田小学校給食棟建設に伴なう六反田遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－197）発掘調査（1983年10月３日～12月10日）の本報告書である。

2．報告書の編集は、田中則和が行い、執筆は田中の外、下記の方々にお願いした。(敬称略)

石　　器：鄧　　聰（東北大学考古学研究室）

植物遺体鑑定：星川清親（東北大学農学部）

なお執筆にあたっては、郡山遺跡担当木村浩二はじめ全職員の協力を得た。

3．報告書の作成は埋蔵文化財収蔵整理室で実施し下記の通り分担した。

図面整理・トレース：田中・熊谷信一

遺物実側・トレース：田中、須江敏、松本敦子・松本幸子（土器）

鄧聰、松本敦子（石器）

遺物写真：鄧、田中

図 版 組：田中、田中敦子

4．作成において下記の方々及び機関より御助言協力を頂いた。

藤沼邦彦・丹羽茂（宮城県文化財保護課）、小井川和夫（東北歴史資料館）、小川貴司（八王子市立郷土資料館）、小金井靖（東京都練馬区役所）、高橋一夫、宮昌之、書上元博（以上埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、福田健司（東京都教育委員会）、服部敬史（八王子市教育委員会）、谷井彪、浅野晴樹（以上埼玉県立嵐山郷土資料館）、村山斌夫（東北歴史資料館）、金子武次郎・清水真人（東北大学金属材料研究所）、白鳥良一（多賀城跡調査研究所）、本郷和郎（涌谷町教育委員会）、森剛男、八王子市立郷土資料館、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、東北歴史資料館、佐々木隆（仙台市科学館）

5．報告書中の土色については『新版標準土色帳』（小林・竹原1973）を使用した。

6．報告書に使用した建設省国土地理院発行の地形図・写真は図中に示した。

7．図版中の方位は全て磁北を北としている。磁北は真北に対して西偏7°20′である。

8．転回して器形の復元実測を行ったものについては、中心線を一点鎖線で示した。

9．スライドを含む全資料は仙台市教育委員会で保管してあるので活用されたい。

調　査　要　項

遺跡名：六反田（ろくたんだ）遺跡（仙台市登録番号Ｃ－197・宮城県登録番号01189）

所在地：仙台市大野田字六反田10番５号（大野田小学校敷地内）

対象面積：168㎡　調査面積168㎡

調査期間：1983年10月３日～12月10日

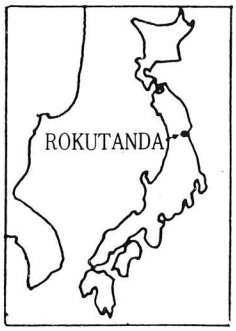
調査主体：仙台市教育委員会

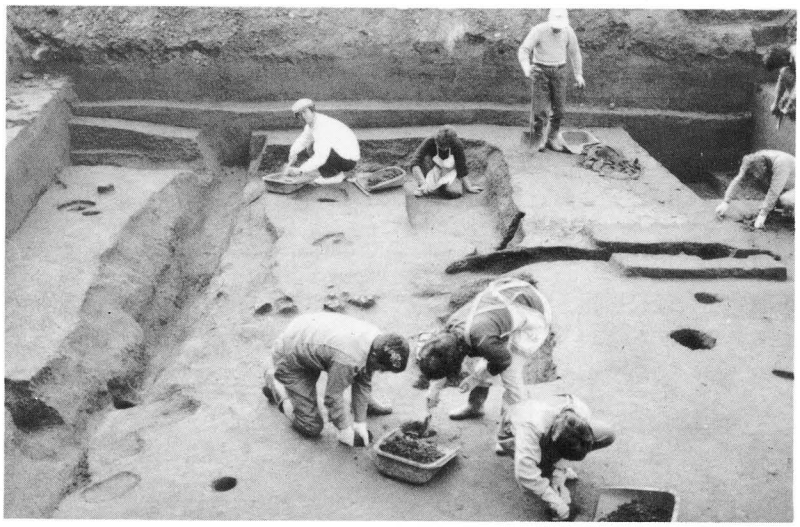
調査担当：社会教育課文化財調査係

主事：田中則和・篠原信彦　教諭：菅原和夫

調査参加者：鄧聰（東北大学考古学研究室）・武藤秀哉・須江敏・松本幸子・阿部孝一・赤川千広・安達八千代・斉藤雅子・斉藤慶子・高橋とみ子

調査協力：菅原干雄・東北大学考古学研究室・鷹觜建設・大野田小学校





１号住居跡調査風景

目　　次

Ⅰ．六反田遺跡のあらまし……1
Ⅱ．立地と歴史的環境……3
Ⅲ．調 査 の 内 容
1．基　本　層　序……7
2．縄文時代後期以前の落込……10
(1)　第21層上面の落込……10
(2)　第18層上面の落込……10
3．縄文時代後期の遺物……12
(1)　後期初頭から中葉の土器……12
(2)　後期後葉の土器……12
(3)　石　　器……14
4．奈良時代の遺構と遺物……17
(1)　遺　　構……17
(2)　遺　　物……19
(3)　遺物の分類と検討……31
5．平安時代の水田跡……45
6．六反田遺跡出土植物遺体鑑定……49
7．検討課題－1号住居跡出土須恵器坏について……52

図　目　次

第1図　明治38年作図の古地図……2
第2図　周辺の遺跡分布図……4
第3図　地形と周辺の主要遺跡……6
第4図　基　本　層　序……8
第5図　第21層上面の落込……10
第6図　第18層上面の落込……11
第7図　縄文時代後期後葉の土器……12
第8図　縄文時代後期初頭～中葉の土器……13
第9図　縄文時代後期礫石器No.1凹孔の形態……14
第10図　縄文時代後期の石器……15
第11図　第1号住居跡他……20

第12図　第９層上面住居跡検出面……21
第13図　第１号住居跡遺物出土状況(1)……24
第14図　第１号住居跡遺物出土状況(2)……25
第15図　第１号住居跡遺物出土状況(3)……26
第16図　７世紀末葉から８世紀前半の土器……38
第17図　第１号住居跡出土遺物……40
第18図　土　　錘……45
第19図　平安時代の水田跡……46
第20図　平安時代の水田跡断面……48

表　目　次

第１表　周辺の遺跡地名表……5
第２表　礫石器観察表……14
第３表　第１号住居跡ピット(1)……22
第４表　第１号住居跡ピット(2)……23
第５表　第１号住居跡土器観察表……39
第６表　土器集計表……44

写　真　目　次

１．縄文時代後期の石器……16
２．第１号住居跡(1)……28
３．第１号住居跡(2)遺物出土状況……29
４．第１号住居跡(3)……30
５．第１号住居跡出土遺物……42
６．平安時代の水田跡……47
７．植　物　遺　体……50

Ⅰ．六反田遺跡のあらまし

1976～78年の調査

六反田遺跡は1976～78年、１～３次の発掘調査で沖積平野における遺跡の重層構造性が明らかとなったが簡単にまとめると下記のようになる。

１．**縄文時代中期中葉**大木８ｂ式期の住居跡が検出され沖積平野における最古の遺構となった。

２．**縄文時代中期末葉**大木10式期の土器埋設遺構１基、ピット１個が検出され遺物が出土した。

３．同上**後期初頭**の竪穴住居跡３軒、土壙49基、集石遺構２基（９層下部から10層上面で検出）遺物包含層の大部分をしめる後期初頭の土器は、従来一括されてきた「前半」の土器から分離されうる好資料となった。（田中則和「第Ⅷ・Ⅸ群土器　後期初頭の土器と前葉の土器」『茂庭』1983仙台市教育委員会）

４．同上**後期中葉**の土器が７層より、**後期後葉**の土器（片）が４・５層より少量出土している。（後者は二次堆積）

５．**弥生時代**天王山式期の土器（片）が第５層より少量出土している。

註　同期の遺物は、1982･3年の調査で、山口遺跡、下ノ内浦遺跡で包含層が検出されている。

６．**古墳時代前期**の溝１本が検出され、（４層上面）塩釜式の土師器甕と前代からの要素をもつ波状口縁の土師器甕（五領式）が共伴している。

７．５層上面で**古墳**の周湟の一部が検出され円筒埴輪が出土した。同面で木棺墓と石棺墓各１基を検出した。これらは５～６世紀と推定され、周辺に分布する大野田古墳群発見の契機となった。

註１．鳥居塚・春日社古墳現地説明会資料 1978　２．長島栄一「大野田古墳群」『年報３－昭和56年度』1982　仙台市教育委員会

８．**奈良時代**の竪穴住居跡１軒（５層上面）溝２本（４層下部）が検出された。

９．**平安時代**の竪穴住居跡１軒、溝状遺構（４層上面）15本、炭化米を含む土壙２基（３層上面と４層上面）が検出された。

10．小溝状遺構群が４層・４層中、５層上面で調査区のほぼ全域で検出された。確認面から古墳、奈良、平安時代の各期にわたる。名取川流域の自然堤防上に多数の類例が知られ[註]、その特徴から畑の可能性が強い。　註　仙台市教育委員会第10・34・52・56集参照

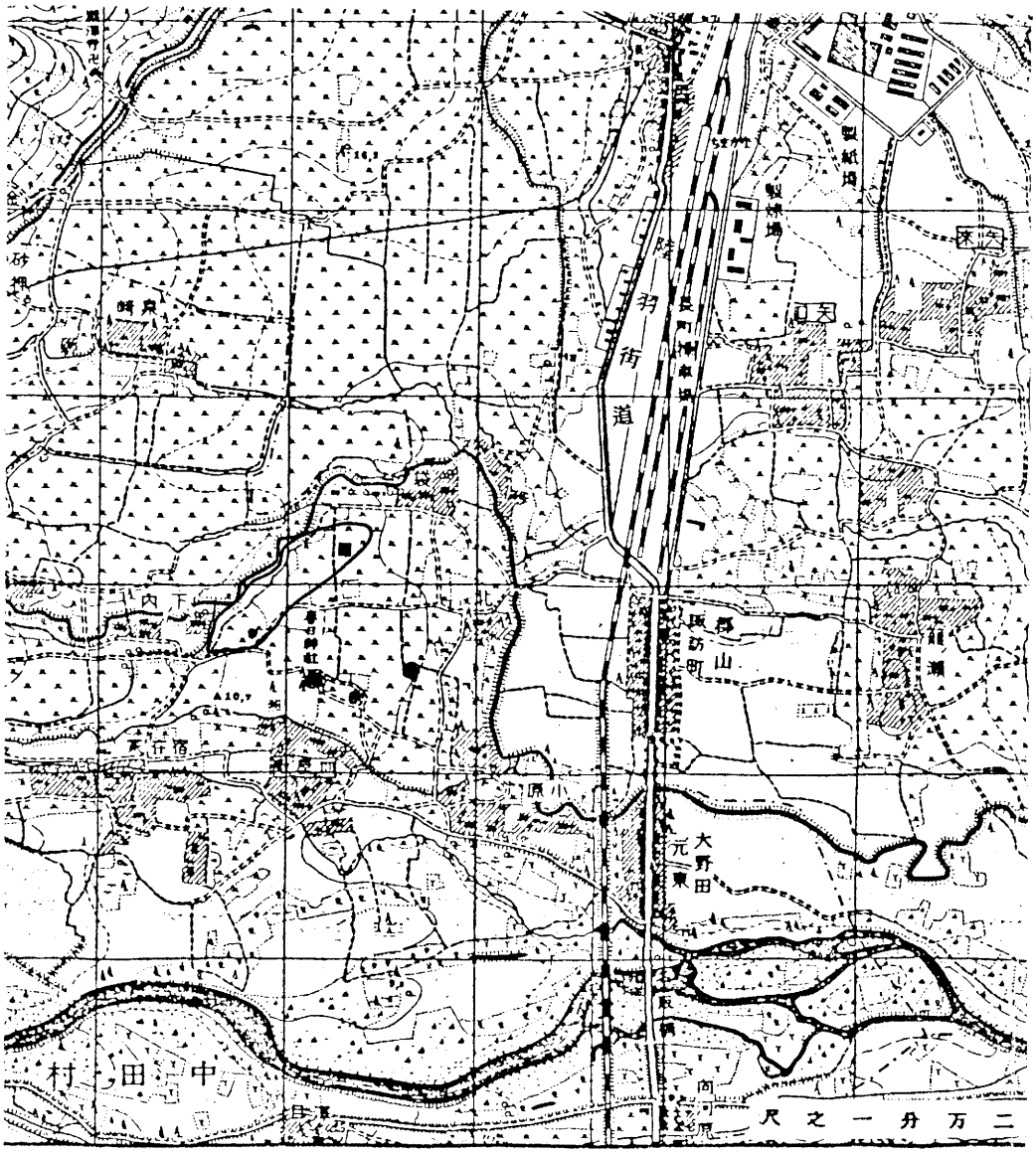
1981～82年の調査は概報が公表されたのみであるが[註]縄文時代後期の層が約15m東方の1978年調査区より90～110㎝下がっており、時代が下るごとに平担化している。平安時代の竪穴住居跡１軒が検出されている。　註　佐藤隆・荒井格「六反田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ』1982　仙台市教育委員会

今回の調査区は、78年の調査区の北東240ｍにあり、縄文時代後期前葉～中葉においては、人類の生活領域たりえない南方への急傾斜地である。８層上面では、ほぼ平担面となり、奈良時代の住居跡１軒が検出された。出土土器の中には、南武蔵を中心として分布する「盤状坏」に近似するものも含まれ８世紀前半における良好な資料と考えられる。今後周辺の自然堤防上に広く分布する奈良時代の集落のありよう、本調査区の東方約1.2kmに位置する郡山遺跡（官衛跡）との関連、関東との関り合い等重要な問題が提起される。

７層は平安時代の水田の床土であり、６層はその作土である。酸化鉄集積層の存在から乾田と考えられる。下ノ内浦遺跡[註]でも同様であり低湿地の湿田と対比される。

註　吉岡恭平他「下ノ内浦遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ」1984　仙台市教育委員会

３・４・５層も水田に伴う作土と考えられ、出土遺物から平安時代後半の可能性が強い。



第１図　明治38年作図の古地図

■ 調査区位置

Ⅱ．立地と歴史的環境

六反田遺跡が位置する富沢・大野田地区は、名取川が形成する自然堤防の拡大と後背湿地の変化につれて 場 の利用の諸様相が明らかになりつつある。[1] 基本的説明については、斉野裕彦「富沢水田遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅲ』[(1)h](1984) に譲り具体的様相について若干述べる。

松本秀明作成の「仙台平野の微地形分布」[2] を若干補正した名取市清水遺跡報文[3]を用いる。

縄文時代（第３図）

早期末葉の遺物の集中個所が山口遺跡[(1)g]で検出されているが、地形との関連を探るには将来の遺構検出に待ちたい。中期中葉から後期初頭にかけては、六反田遺跡[(1)a]、下ノ内遺跡[(1)c・e]の調査が知られるが、六反田遺跡の調査では幅70～80m の平担面に集落が営まれており自然堤防の形状は狭長であったと推定される。後期前葉段階では、自然堤防から後背湿地にかけての移行地域が遺物の廃棄の場や一時的な礫を素材とする石器の使用場所となったことがあるとされている。[(1)g]

弥生時代

中期においては、後背湿地に属する富沢水田遺跡鳥居原・中谷地地区[(1)c・e]、泉崎前遺跡[(4)]から水田跡が検出されており、大畦と小畦による水田区画の明瞭な前者はより低湿な地域に属している。

後期では未だ明瞭な水田跡が検出されていない[(5)]が、山口遺跡1982年調査区南半[(1)g]、下ノ内浦遺跡[(6)]の自然堤防から後背湿地への移行地域には、遺物包含層が形成され、後者では墓壙が検出されている。今後集落跡が発見され、より地形との関わりが明らかとなることが期待される。

古墳時代（第３図）

前期では、下ノ内・伊古田遺跡[(1)c・e(5)]に集落が形成され、自然堤防がより南側に拡大し、微高地Ａはほぼ図示された地形となっている。中期に入ると微高地Ａにひき続き集落が形成されている他、微高地Ａの東方一帯に古墳群が形成されている。

奈良時代

山口遺跡1982年調査区南半[(1)g]、下ノ内浦遺跡[(1)f(7)]、下ノ内遺跡[(1)c・e]、六反田遺跡[(1)a(8)]一帯には広く集落跡が存在することが明らかとなっており微高地Ａは更に北側に拡大していたようである。Ａの東方にある狭長な微高地Ｂは縄文時代における南方への急傾斜はほぼ平担に近くまで被覆されており、８世紀前半の住居跡が本調査で確認された。

平安時代

集落跡は前代同様微高地Ａ全域に存在する他、灰白色火山灰降灰時（10世紀前半と推定）の水田が富沢水田遺跡全域に分布する。特に本調査区が位置する微高地Ｂでは、奈良時代の住居跡が埋まりきった直上に、この期の乾田が営まれている。平安時代末葉の河川跡は山口遺跡[(1)g]で検出されているが住居跡は検出されていない。[(9)]

註

(1)a 田中則和他『六反田遺跡発掘調査報告書』1981　仙台市教育委員会

b 佐藤洋他『山口遺跡発掘調査報告書』1981　仙台市教育委員会

c 篠原信彦他『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ』1982　仙台市教育委員会

d 長島栄一「大野田古墳群」『年報Ⅲ』1982　仙台市教育委員会

e 篠原信彦他『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』1983　仙台市教育委員会

f 工藤哲司他『下ノ内浦遺跡』1982　仙台市教育委員会

g 田中則和他『山口遺跡Ⅱ』1984　仙台市教育委員会

h 斉野裕彦他『仙台平野の遺跡群Ⅲ』1984　仙台市教育委員会

(2) 松本秀明「仙台平野の沖積層と降水期における海岸線の変化」『地理学評論』1981

(3) 丹羽茂他「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡Ⅴ』1981　宮城県教育委員会

(4) 工藤哲司『泉崎前遺跡』1984　仙台市教育委員会

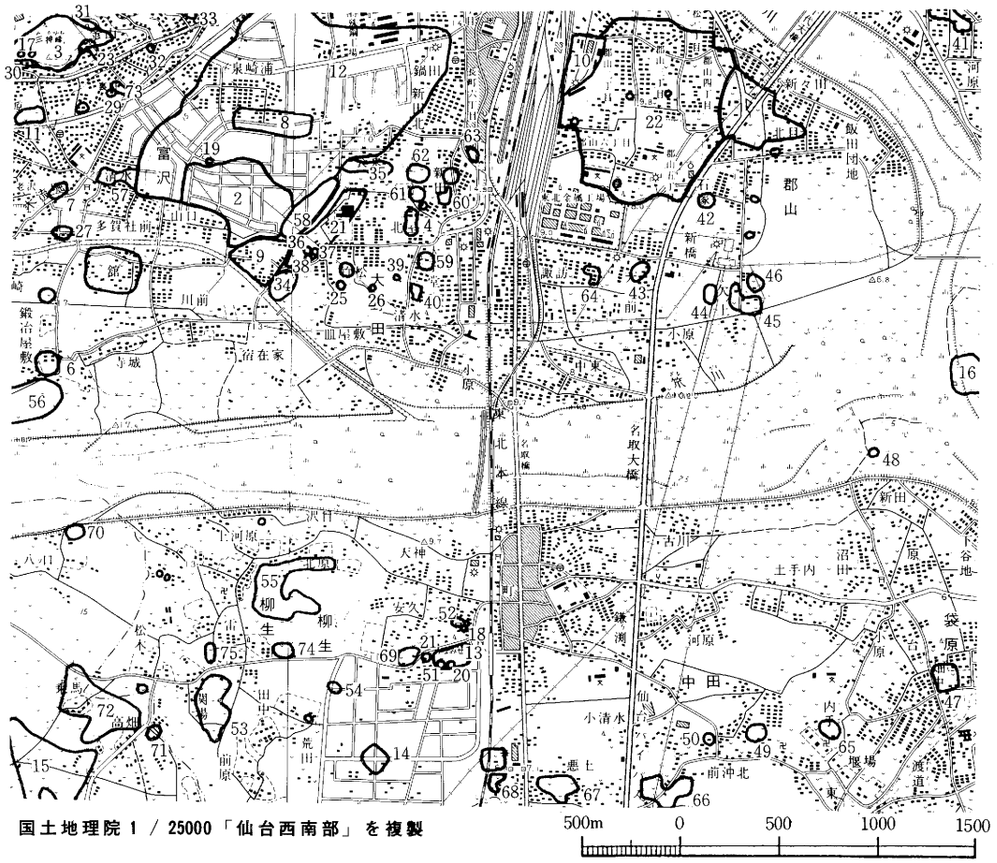
(5) (1)gでは水田跡の可能性ある畦状のもり上がりが確認されている。

(6) 吉岡恭平他『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』1984　仙台市教育委員会

(7) 1984年度の発掘調査で奈良時代の住居跡を検出中である。

(8) 1984年度の発掘調査で奈良時代の住居跡を検出中である。

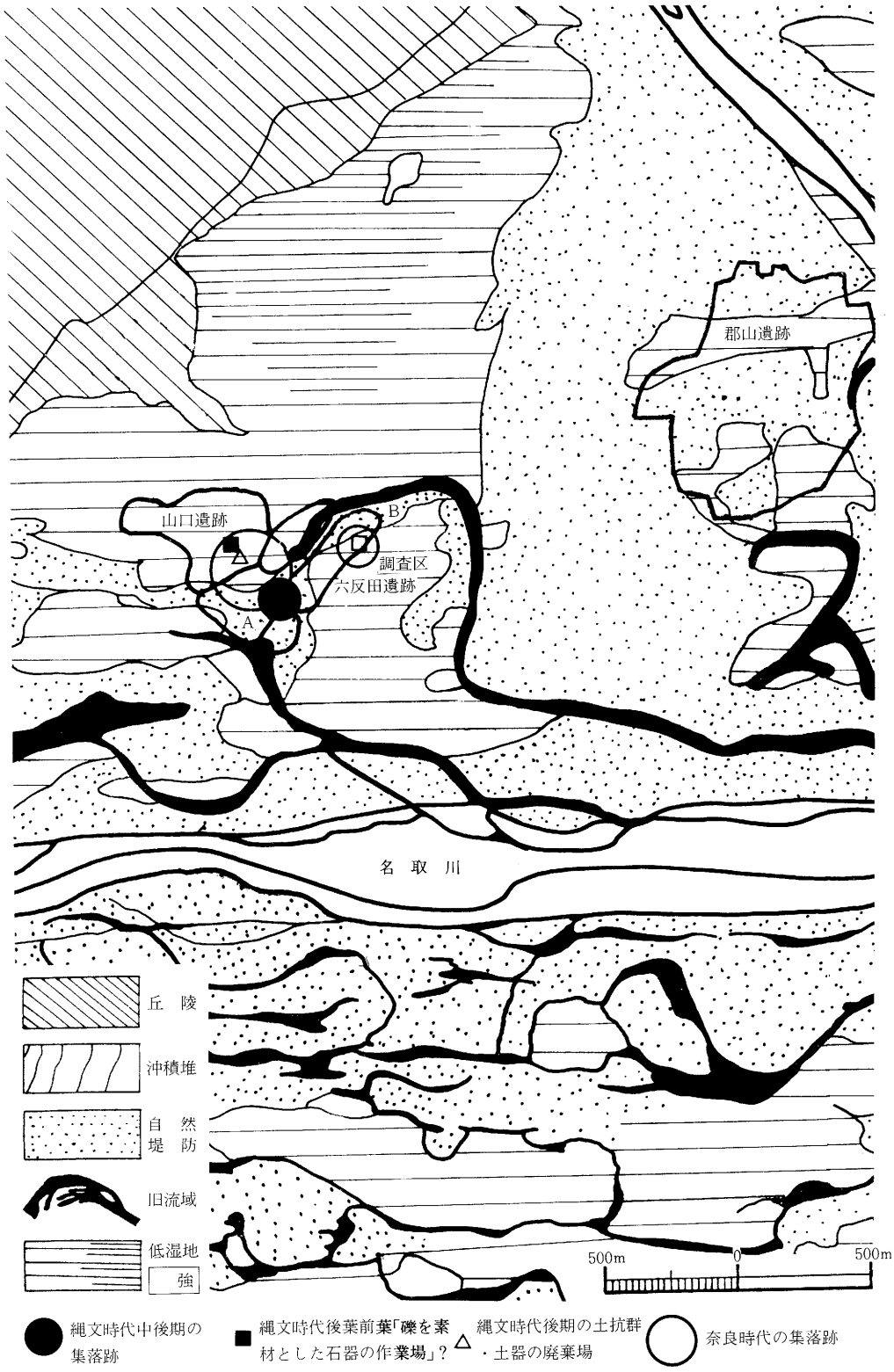
(9) この時期（赤焼土器小皿の盛行期）の住居跡は県内では類例が少ない。あるいは住居形態が竪穴構造から例えば掘立柱建物に変化した可能性もある。



第２図　周辺の遺跡分布図

No.	遺跡名	種別	立地	年代	文献
1	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文（中・後・晩期）弥生 古墳・奈良・平安・江戸	仙台市教育委員会　1981　六反田遺跡発掘調査報告書　仙台市文化財調査報告書第34集
2	山口遺跡		自然堤防 後背湿地	縄文（草・中・後・晩期）弥生・古墳・奈良・平安・中世	〃　〃　山口遺跡発掘調査報告書　〃　〃　第33集
3	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文（前・中期），平安	〃　1980　三神峯遺跡発掘調査報告書　〃　〃　第25集
4	大野田遺跡	包含地	自然堤防	縄文（後期）・弥生（中期）	
5	鍛冶屋敷A遺跡	包含地	自然堤防	縄文・奈良・平安	宮城教育大学考古学研究会　1973　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古５
6	鍛冶屋敷B遺跡	包含地	自然堤防	縄文・奈良・平安	〃　〃　〃　〃　〃　〃
7	富沢上ノ台遺跡	包含地	河岸段丘	縄文・平安	
8	泉崎浦遺跡	平安水田跡	沖積平野（畦状地割）	縄文・古墳・平安・近世	仙台市教育委員会　1982・83　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ，Ⅱ　仙台市文化財調査報告書第40・56集
9	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・平安	〃　1982　〃　〃　概報Ⅰ　〃　〃　第40集
10	西台畑遺跡	包含地・カメ・棺墓	自然堤防	縄文・弥生（中期）・古墳	県教委　1972　第27集・仙教委　1983　第57集・県　1981　「宮城県史」　34
11	原遺跡(西台遺跡)	包含地	台地	弥生・古墳・平安	宮城教育大学考古学研究会　1973　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古５
12	富沢水田遺跡	水田跡	沖積平野の後背湿地	弥生・平安・平安以降	仙台市教育委員会　1982・83　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ，Ⅱ　仙台市文化財調査報告書第40・56集
13	安久東遺跡	集落跡・古墳群	自然堤防	弥生・古墳（前期）・奈良・平安・中世・近世	〃　1976　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報　仙台市文化財調査報告書第10集
14	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安	〃　1978・82　栗遺跡発掘調査報告書　仙台市文化財調査報告書第14・41集
15	高畑遺跡	包含地	沖積平野	弥生・古墳・奈良・平安	恵美昌之　1968　文化の伝播よりみたる古代東北開拓の様相 宮城教育大学考古学研究会　1975　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古７
16	日辺遺跡	包含地	河川敷	古墳（中期）	
17	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳（後期）	松本彦七郎　1930　陸前国名取郡西多賀村の三石器時代及至直後遺跡（上，下）　考古学雑誌20の２，４ 伊東信雄　1950　仙台市内の古代遺跡　仙台市史３
18	伊豆野権現古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期）	
19	教塚古墳	円墳	沖積平野	古墳（後期）	氏家和典　1981　古墳時代　宮城県史34
20	安久諏訪古墳	横穴式石室（現在所在地）			〃　〃　〃　〃　〃
21	〃　〃　〃	(旧所在地)	自然堤防	古墳（後期後半）	〃　〃　〃　〃　〃
22	郡山遺跡	官衙跡	自然堤防	古墳（末期）～奈良（初期）	仙台市教育委員会　1981・82・83　郡山遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　仙台市文化財調査報告書第29・38・46集 〃　1982　仙台平野の遺跡群Ⅰ　〃　〃　第37集 〃　1982　郡山遺跡　〃　〃　第42集
23	金山窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳（５世紀中葉～５世紀後半）	古窯跡研究会　1974　富沢窯跡・仙台三神峯丘陵所在埴輪窯跡調査報告書　古窯跡研究報告３
24	大野田古墳群	円墳？	沖積平野	古墳（５世紀後半～６世紀初頭）	仙台市教育委員会　1982　年報３　仙台市文化財調査報告書第41集　№１文献
25	春日社古墳	円墳	沖積平野	６世紀	〃　1977　鳥居塚・春日社古墳　現地説明会資料１・２
26	鳥居塚古墳	円墳	沖積平野	古墳（６世紀）	〃　〃　〃　〃　〃　１
27	堀ノ内遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	宮城教育大学考古学研究室　1973　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古５
28	原東遺跡	包含地	台地	古墳・奈良・平安	〃　〃　〃　〃　〃　〃
29	裏町古墳	前方後円墳	台地	古墳	仙教委　1974　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書　第７集・県　1981　「宮城県史」34
30	富沢窯跡（木戸口窯跡）	埴輪窯	丘陵南斜面	古墳・奈良・平安	古窯跡研究会　1974　富沢窯跡　古窯跡研究年報告３ 渡辺泰伸　1975　富沢埴輪窯跡　日本考古学年報26・県　1981　「宮城県史」34
31	土手内横穴群	横穴古墳群	丘陵斜面	古墳	伊東信雄　1950　仙台市内の古代遺跡　仙台市史３
32	金洗沢古墳	円墳	台地	古墳	〃　〃　〃　〃　〃
33	砂押古墳	円墳又は前方後円墳	台地	古墳	仙台市教育委員会　仙台平野の遺跡群Ⅱ　仙台市文化財調査報告書第47集
34	伊古田遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	宮城教育大学考古学研究室　1973　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古５
35	袋東遺跡	包含地	自然堤防	古墳・平安	
36	五反田石棺墓	組合わせ式石棺	自然堤防	古墳	仙台市教育委員会　1979　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし　仙台市文化財調査報告書第16集 〃　1981　〃　〃　報告書　〃　〃　第34集
37	五反田古墳	円墳	自然堤防	古墳	№36　文献・№５　文献
38	五反田木棺墓	割竹形木棺	自然堤防	古墳	仙台市教育委員会　1981　六反田遺跡発掘調査報告書　仙台市文化財調査報告書第34集
39	王の壇古墳	円墳	沖積平野	古墳	
40	長町清水遺跡（皿屋敷遺跡）	古墳？	自然堤防	古墳？	
41	砂押Ⅱ遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	宮城教育大学考古学研究室　1975　名取川水系分布調査　宮教考古７
42	矢来遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	〃　〃　1974　〃　〃　〃　6
43	籠ノ瀬遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃
44	欠ノ上Ⅰ遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃
45	欠ノ上Ⅱ遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	〃
46	欠ノ上Ⅲ遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	宮城教育大学考古学研究室　1974　名取川水系分布調査　宮教考古６
47	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	仙台市教育委員会　1983　中田畑中遺跡発掘調査報告書　仙台市文化財報告書第53集・№41　文献
48	大塚山古墳	円墳	河川敷	古墳	伊東信雄　1950　仙台市内の古代遺跡　仙台市史３
49	前沖北遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	宮城教育大学考古学研究室　1974　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古６
50	前沖中遺跡	包含地	沖積平野	古墳・奈良・平安	〃　〃　〃　〃　〃　〃
51	安久東古墳	横穴式積石石室	自然堤防	古墳	仙台市教育委員会　1976　安久東遺跡発掘調査概報　仙台市文化財調査報告書第10集 土岐山　武　1980　東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ　宮城県文化財調査報告書第72集
52	中田神社裏遺跡	包含地・古墳群？	自然堤防	古墳・平安	佐藤好一　1972　名取川水系遺跡分布第２次・第３次調査　宮教考古４
53	関場遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	
54	谷地田遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	宮城教育大学考古学研究室　1975　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古７
55	柳生台畑遺跡		自然堤防	古墳？・奈良・平安	
56	六本松遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	宮城教育大学考古学研究室　1973　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古５
57	富沢清水遺跡	包含地	沖積平野	奈良・平安	〃　〃　1974　〃　〃　〃　6
58	下ノ内浦遺跡		自然堤防	奈良～平安	仙台市教育委員会　1983　下ノ内浦遺跡　仙台市文化財調査報告書第59集
59	北屋敷遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	
60	新田遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	宮城教育大学考古学研究室　1973　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古５
61	元袋Ⅱ遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	〃　〃　〃　〃　〃　〃
62	元袋Ⅲ遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	〃　〃　〃　〃　〃　〃
63	長町六丁目遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	
64	的場遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	宮城教育大学考古学研究室　1974　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古６
65	内手遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	〃　〃　〃　〃　〃　〃
66	横河原遺跡（柳生遺跡）		自然堤防	奈良・平安	仙台市教育委員会　1982　年報３　仙台市文化財調査報告書第41集・№41　文献
67	北目遺跡（中田北遺跡）	包含地	自然堤防	奈良・平安	宮城教育大学考古学研究室　1975　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古７
68	壇腰遺跡	包含地	沖積平野	奈良・平安	佐藤信要　1714　封内名蹟志（巻第六）　仙台叢書８
69	安久遺跡	集落・古墳跡	沖積平野	奈良・平安	仙台市教育委員会　1975　仙台市中田町安久遺跡発掘調査略報　現地説明会資料
70	八ツ口遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	宮城教育大学考古学研究会　1973　名取川水系分布調査　宮教考古５
71	窪田遺跡	包含地	自然堤防	奈良（末期），平安	
72	乗馬遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安	
73	裏町東遺跡	包含地	台地	平安	宮城教育大学考古学研究室　1973　名取川水系遺跡分布調査　宮教考古５
74	雷東遺跡	包含地	自然堤防	平安	〃　〃　〃　〃　〃　〃
75	雷遺跡	包含地	自然堤防	平安	〃　〃　〃　〃　〃　〃

第１表　周辺の遺跡地名表



第3図　地形と周辺の主要遺跡

Ⅲ 調 査 の 内 容

1．基本層序

調査地は１ｍ50cm前後の盛土でおおわれており盛土以前の現代水田作土（第１層）上面の標高は10m 60cmである。第２層は現代水田作土に伴う床土（酸化鉄集積層）である。

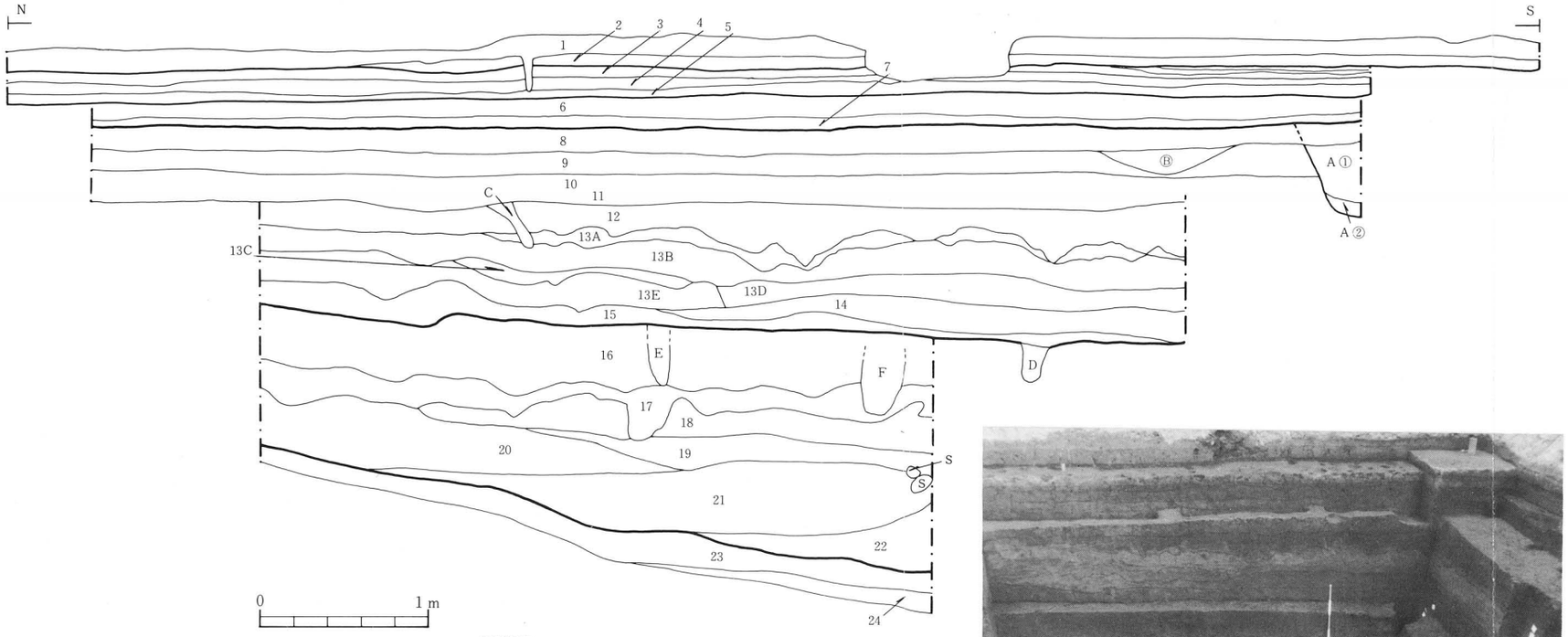
第３・４層は西端で検出された畦？との関係から水田作土と考えられる。**第５層**は酸化鉄斑が多く入り床土と考えられる。断面観察から複数の水田面が含まれている可能性がある。平安時代後半の赤焼土器片が相当量含まれこの期の可能性が高い。

第６層は、第４層検出の畦？の下層で検出された畦？との関係から水田作土と考えられ、**第７層**（酸化鉄斑とマンガンが混じりあう）床土上面で検出された畦？に沿う浅い溝に多量の灰白色火山灰が含まれ平安時代10世紀前半の年代が考えられる。

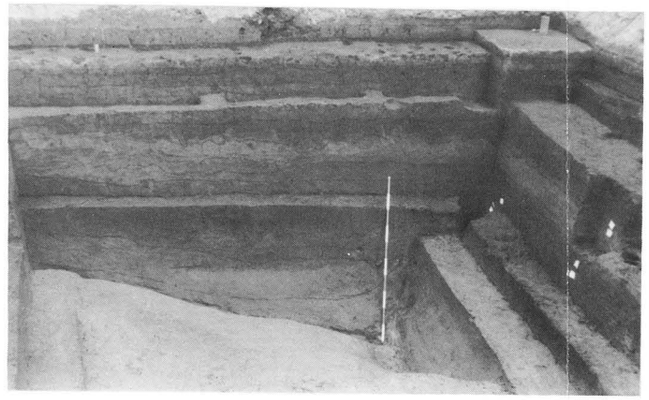
第８層は、奈良時代前半の竪穴住居跡等の遺構の確認面である。この８層までは水平堆積を示しているが第９層から南へ傾斜を示し層を増すごとに傾斜度を増していく。第８層以下13層まで遺物は出土しなかった。13～15層は他層に比し凹凸がある。

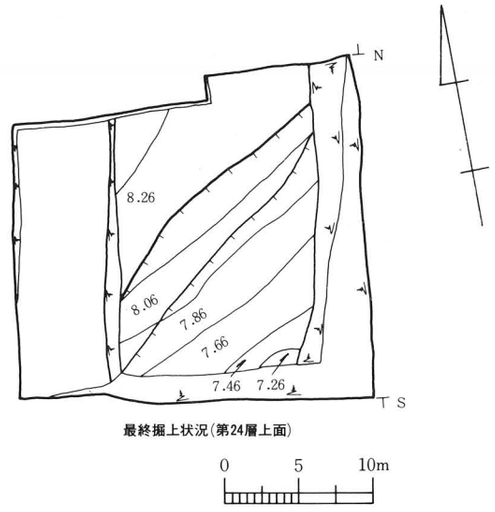
第14層から第16層上面からは縄文時代後期前葉の土器片と礫を素材とする石器が少量出土している。第17層には後者が少量含まれるが17層以下の年代は不明である。

第19層以下は黄褐色系の砂質であり第21層の傾斜側南端では10cm前後の円礫がみられ**第24層**に至ると円礫を多量に含む層となる。第19層上面では性格不明の落込が４基、第21層上面では１基検出されている。**第21～23層**では礫を素材とする石器？が１点出土している。第24層上面では南方へ平均12°の傾斜を示す。24層北端の標高は8.06m　南端の標高は7.61mであり更に南へ傾斜していく様相を呈している。



東壁断面





最終掘上状況(第24層上面)

層位	土色	土性	備考	
第1層	灰オリーブ色 7.5Y 5/1.5	シルト	現代水田耕作土	水田跡(現代)
第2層	浅黄橙色 7.5Y 8/3	シルト	現代水田床土	
第3層	灰オリーブ色 7.5Y 5/1.5	シルト	酸化斑薄く入る。南側に酸化鉄集積層あり(ある時期の床土)。	水田跡Ⅱ(平安時代?)
第4層	浅黄橙色 7.5Y 8/3	シルト	灰オリーブ7.5Y 5/1シルトが境不鮮明に入る。2層より薄い	
第5層	灰黄褐色 10YR 4/2	シルト	2～3mmの酸化鉄斑入る。マンガン集積層か。	
第6層	灰黄褐色 10YR 4/2.5	シルト	酸化鉄斑を境不鮮明に含む。	水田跡Ⅰ(平安時代)
第7層	黄褐色 10YR 5/6 シルト(酸化鉄斑)と暗褐色7.5YR 3/3 シルトが境不鮮明に混じりあう。床土			
第8層	暗褐色 10YR 3/3	シルト		
第9層	にぶい黄褐色 10YR 5/3.5	シルト		
第10層	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト		
第11層	暗褐色 10YR 3/3	シルト		
第12層	黒褐色 10YR 3/2	粘土質シルト		
第13A層	にぶい黄橙色 10YR 5/4 砂質シルトと暗褐色10YR 3/3 シルトが数cm単位でブロック状に混合			
第13B層	明黄褐色 10YR 7/6 砂質シルトと灰白5Y 7/1 砂質シルトが境不鮮明に混合。			
第13C層	〃 〃 〃 B層よりやや暗い			
第13D層	明黄褐色 10YR 6/6	砂質シルト		
第13E層	褐色 10YR 4/3.5	粘土質シルト		

第14層	にぶい黄褐色 10YR 5/4	シルト質粘土	
第15層	明黄褐色 2.5Y 6/6	シルト	縄文時代後期の遺物を含む。
第16層	暗褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	
第17層	暗褐色 10YR 5/6 粘土質シルトと明黄褐色10YR 5/6 粘土質シルトが入りまじる。		
第18層	明黄褐色 10YR 6/6	粘土質シルト	
第19層	黄褐色 10YR 5/6	シルト質砂	
第20層	にぶい黄褐色 10YR 5/3	シルト質砂	明緑灰色 10GY 7/1.5 斑(2～3cm)を含む。
第21層	にぶい黄色 2.5Y 6/4	砂	南側にいくほど粒径大。南側1mでは1～3cmの円礫含む。
第22層	浅黄～にぶい黄色2.5Y 7/4～6/4	砂	ラミナ状に堆積。淡黄色の円礫(1～3mm)を含む。
第23層	黄褐色 10YR 5/6	砂質シルト	
第24層	明黄褐色 10YR 5/6	砂	円礫(淡黄色 2.5Y 8/4) (1～3mm)を多量に含む。
A－①	暗褐色 10YR 3/3	シルト	
A－②	黒褐色 10YR 3/2	シルト質粘土	
B	にぶい黄褐色 10YR 4/3	粘土質シルト	
C	暗オリーブ褐色 2.5Y 3/3	シルト質粘土	
D	暗灰黄色 2.5Y 4/2	シルト質粘土	
E	暗褐色 10YR 3/3 とにぶい黄褐色10YR 5/4 粘土質シルトが入りまじる。		
F	にぶい黄橙色 10YR 6/4・明黄褐色 10YR 6/6.5・灰黄褐色 10YR 5/2 粘土質シルトが入りまじる。		

第4図 基本層序

2．縄文時代後期以前の落込

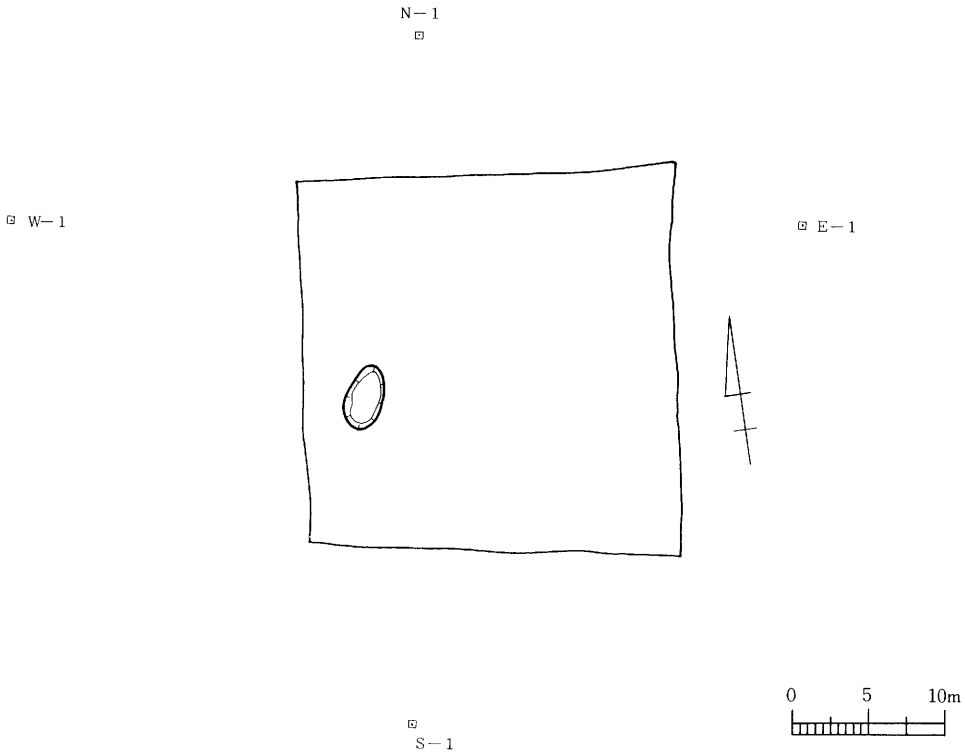
(1) 第21層上面の落込

落込１基を検出した。深さ10cm前後で皿形を呈している。性格は不明である。

年代は第16層上面からは縄文時代後期前葉の遺物が出土しており、第17層以下には年代の確定しうる遺物は出土しておらず縄文時代後期以前である。

(2) 第18層上面の落込

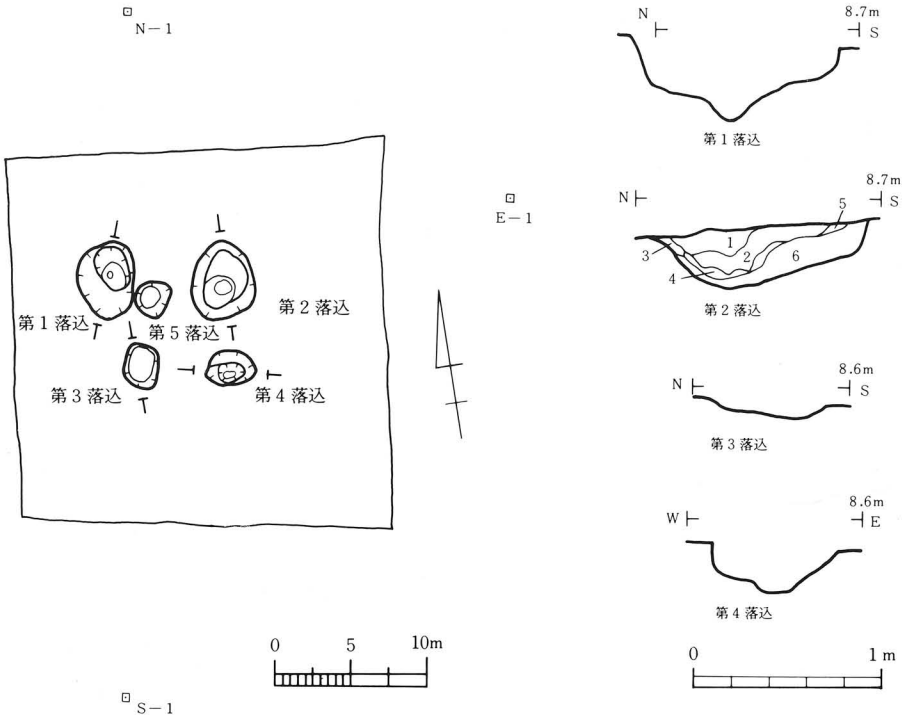
第19層上面で落込５基を検出したが、第18層上面でりんかくのあいまいな土色の違いを確認している。深さ10～50cmで壁から底面にかけて不整な凹凸がある。集中的に分布することから多少人為的なものの可能性があるが、人為的なものとは断定し難い。



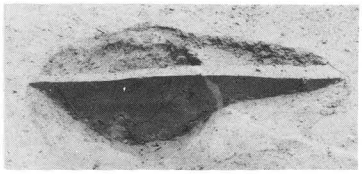
第21層上面ピット１

層位	土　　色	土　性	備　　考
１層	暗褐色 10ＹＲ ⅔	砂質シルト	灰色と黄褐色の砂を含む

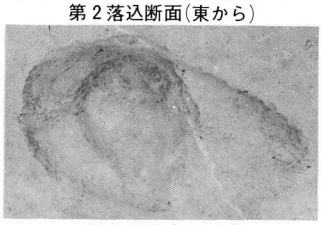
第５図　第21層上面の落込



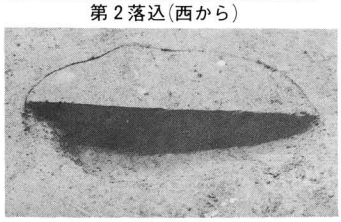
19層上面検出状況(西から)



第2落込断面(東から)



第2落込(西から)



第1落込(南から)

遺構名	層位	土色	土性	備考
第1落込	1	にぶい黄褐色 10YR 4/3.5	粘土質シルト	明黄褐色10YR 7/6粘土質シルト斑（1cm前後）を若干含む
第2落込	1	黒褐色 10YR 2/3	粘土質シルト	微量の黄褐色砂を含む
	2	暗褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	少量の黄褐色砂を含む
	3	黒褐色 10YR 3/2	粘土質シルト	
	4	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	
	5	暗褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	黄褐色砂をブロック状に含む
	6	褐色 10YR 4/4	シルト	黄褐色砂を多量に含む
第3落込	1	にぶい黄褐色 10YR 4/3	粘土質シルト	
第4落込	1	にぶい黄褐色 10YR 4/3	粘土質シルト	

第6図　第18層上面の落込

3．縄文時代後期の遺物

(1) 後期初頭から中葉の土器

第14層上面で１点、第15層上部で１点、第16層上面で２点、計４点出土しいずれも細片である。出土量の少なさ、傾斜地、周辺の後期遺跡の存在[1]から流れこみと考えられる。

第８図１・２は細片のため年代的に細別できないが、後期初頭から前葉に属すると思われる。３は、撚糸地文地上に弧状の多条沈線文が描かれるものである。細片のため年代的に細別できない。後期初頭の宮城県菅生田遺跡[2]例や山口遺跡[3]例のように弧文は連続しない。後期中葉の福島県川原遺跡[4]例には部分的にみれば弧文が連続しない部分もみられる。後期初頭から中葉の幅でおさえておきたい。

註 (1)田中則和他『六反田遺跡発掘調査報告書』1981　仙台市教育委員会

(2)丹羽茂他「菅生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ』1982　宮城県教育委員会

(3)田中則和・佐藤甲二・主浜光朗他『山口遺跡Ⅱ』1984　仙台市教育委員会

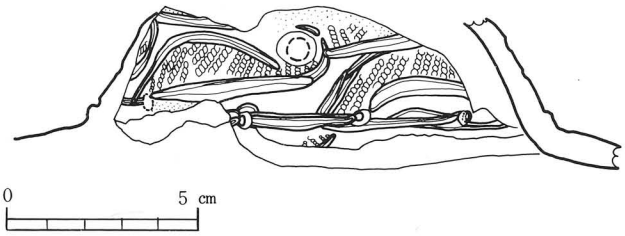
(4)目黒吉明他「川原遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』1975　福島県教育委員会

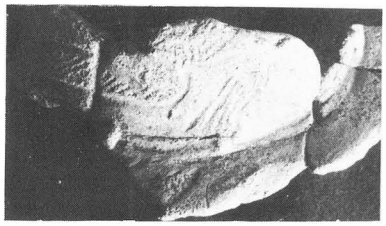
(2) 後期後葉の土器

第８層上面確認の奈良時代の住居跡床面で出土した。肩の張りが強いが壺形土器とみたい。入組状の磨消縄文で瘤付を特徴とする後期後葉、金剛寺式[1]の土器である。

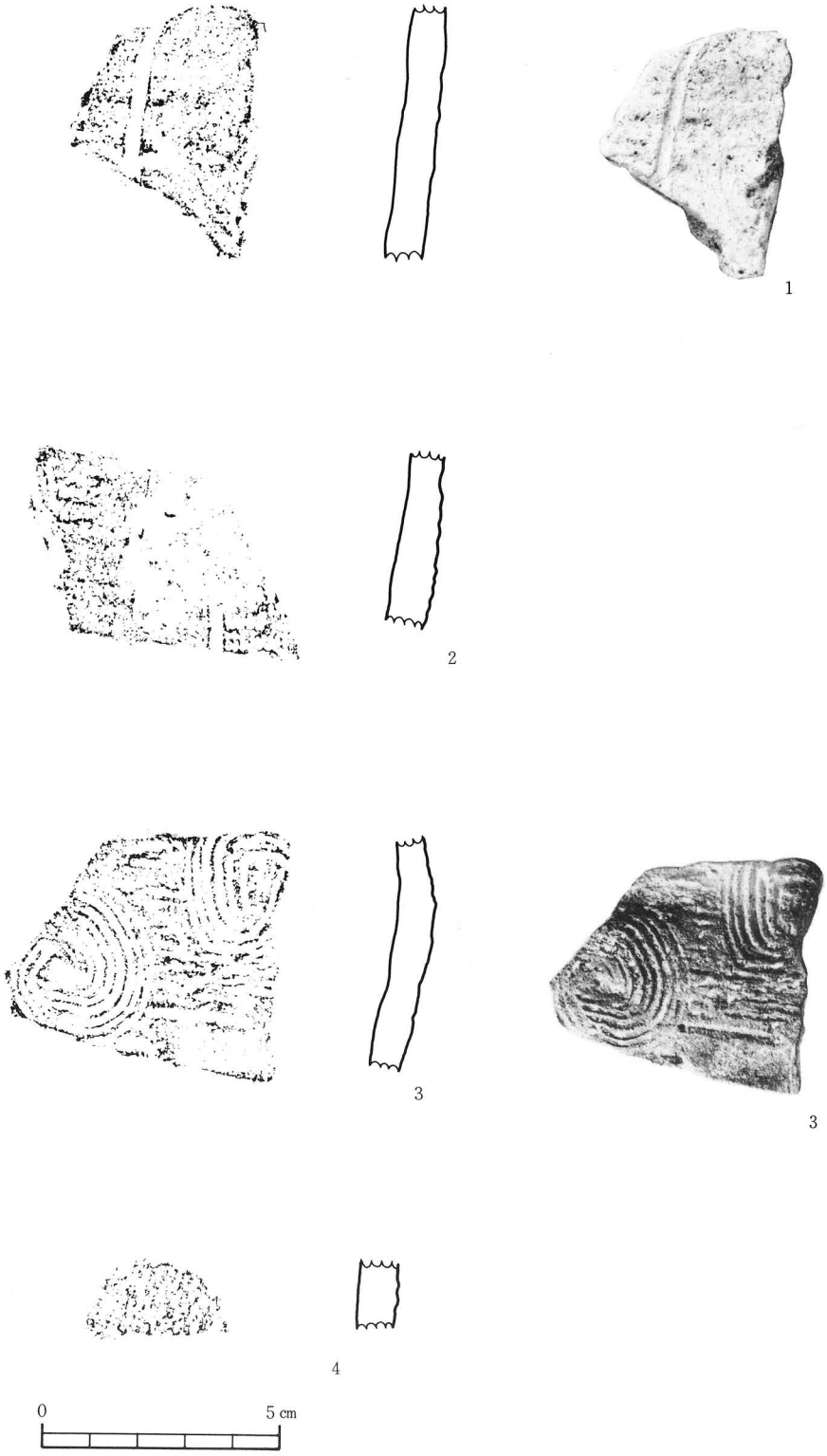
註 (1)伊東信雄「古代史」『宮城県史』1957

「縄文土器」『宮城県史34』1981





第７図　縄文時代後期後葉の土器



第８図　縄文時代後期初頭～中葉の土器

(3) 石器（第10図・写真１）

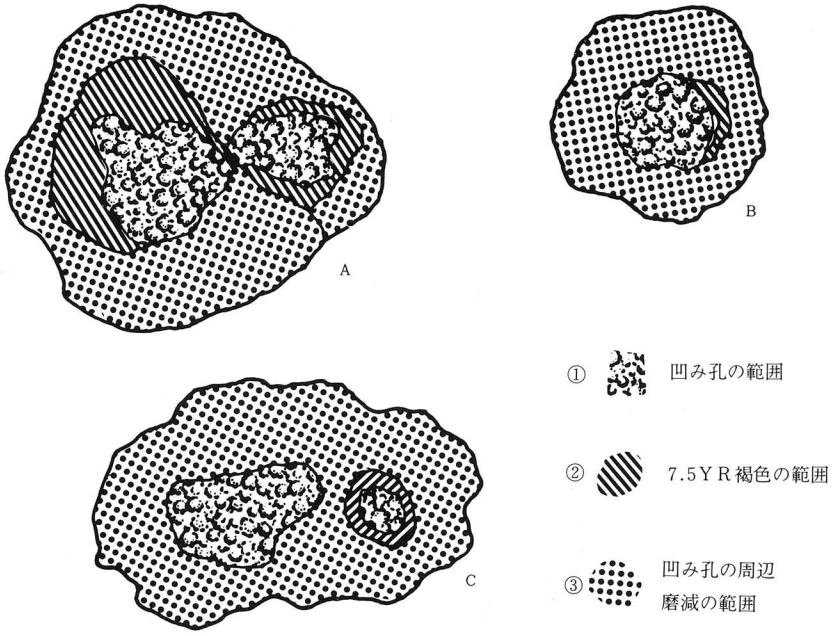
16・17層から出土した礫石器は６点あり、第２観察表を参考にして頂く。ここでは１号礫石器に触れてみたい。１号礫石器は大きい凹孔５個が一面（３個）と一側（２個）に並ぶように見られる。平面形は楕円形であり、断面形は◡の形が見られる。凹孔の周辺をよく見るとより磨滅され、使用中にできたものではないかと考えられる。さらに凹孔は製作中、或いは使用中にできたかどうか解明はできないが、使用する際に石器の破損があるために、凹孔の形は少しずつ変わってくることが予想できる。（第９図　礫石器No.１　凹孔の形態）。

なお21～23層？出土のものは後期以前と思われるが便宜的に一括して図示した。

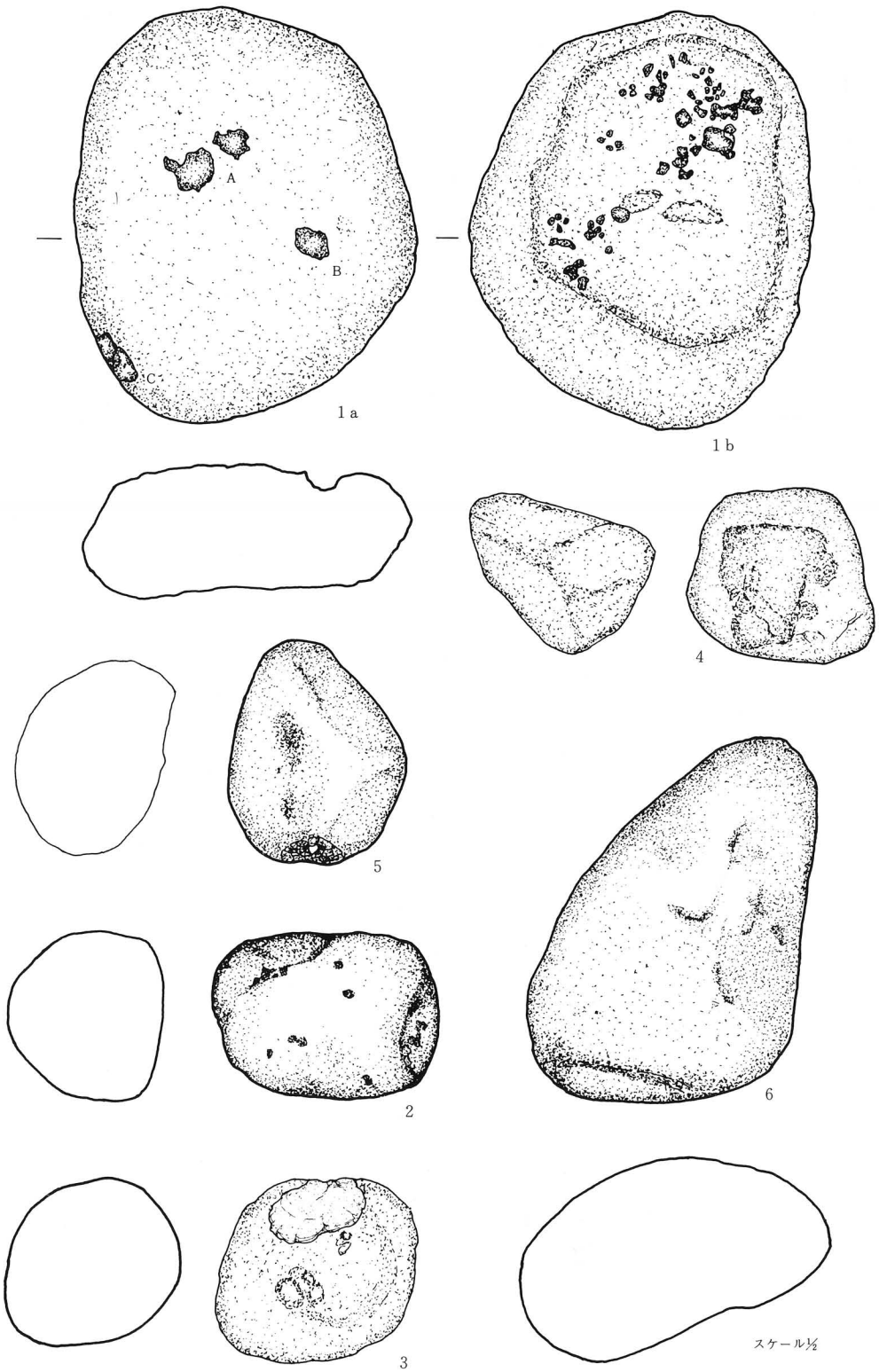
単位：cm、g

図	層　位	長さ	幅	厚さ	重　量	使　用　痕　・　他	石　材	登録番号
1	16 層 上 面	14.9	12.6	5.8	1424.5	7.5ＹＲ¾ 褐色の付着物が両面にあり、特に凹み孔に集中する。両側面に敲打痕がある。	石英安山岩	Ｓ － ７
2	16 層 上 面	8.4	6.1	5.0	342.5	一側に敲打痕がある。	安　山　岩	Ｓ － 11
3	16 層 上 面	7.6	6.3	4.4	294.0	打痕と磨面がある。	安　山　岩	Ｓ － 13
4	17　　面	7.4	6.6	5.1	245.0	一面に磨面がある。	安　山　岩	
5	17 層 上 面	7.9	6.8	6.0	379.0	一側に敲打痕がある。	安　山　岩	Ｓ － 23
6	21～23層？	15.0	9.9	5.8	982.5	一側に磨面がある。	安　山　岩	

第２表　礫石器観察表



第９図　縄文時代後期礫石器No.１凹孔の形態　※第10図１ａと対応



第10図　縄文時代後期の石器

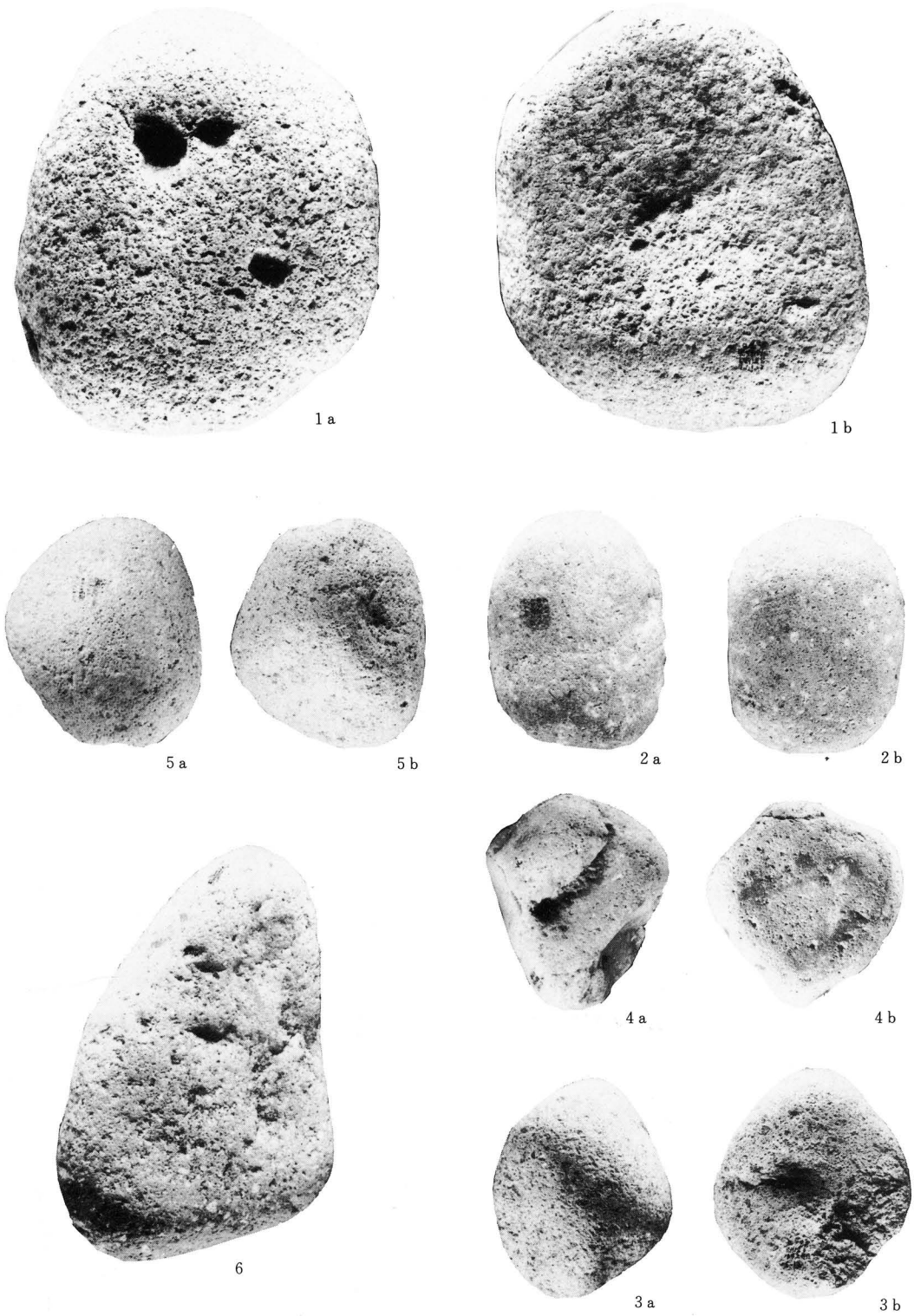


写真１　縄文時代後期の石器

4．奈良時代の遺構と遺物

(1) 遺　　構

第１号住居跡

確認面：第８層上面

重　複：第５号溝に切られる。

平面形：隅丸方形　南側へやや台形ぎみに広がる。

規　模：東西６.１ｍ、柱穴との配置関係を考慮すれば南北軸もほぼ同規模。

方　向：Ｎ－11°－Ｅ（東西辺の直交線）

Ｎ－７°－Ｅ（煙　道）≒真北

壁　：：床面からの最大残存高は約45cm

周溝との間に帯状の平場をもつところが東西両側辺にあり、そこからの立ち上がりは約74°である。

床　面：ほぼ平担であるが北東部のピット密集辺は、周囲より低くなっており最大10cmの比高差がある。凹部には、にぶい黄橙色10ＹＲ5/4シルト質砂が部分的に２～３cmの厚さで認められる。固くしまってはおらず貼床かどうかは不明である。

柱　穴：堀り方と柱穴痕が明瞭に区別されるのは、ピット１・34・37・30と27・20・２・28である。前者は東西に長い方形配置（東西3.65m・南北3.55～58m）を示し後者は、東西が南北より少し長く、ピット20が前者に沿う方形配置より東に75cmずれ不整台形を呈する。但し西に75cmの位置には深さ51.5cmのピット38があり柱抜取り穴の可能性もある。ピット20はピット38のたて替の可能性もある。ピット１・28の焼土を含む堆積土も柱がたて替られた可能性を示している。

周　溝：調査範囲では、住居壁下をカマドを除き全周している。上端幅は25～80cmで45cm前後のところが多い。下端幅は10～45cmで東西両辺では25cm前後である。東西両壁下には、幅10cm前後の狭長な平場がある。床面からの深さは20～25cmである。東南部の周溝内には径10cm前後の小ピットがあったが図化していない。

カマド：北壁中央やや東側に設置されている。両側壁、煙道掘りこみ部が残存している。両側壁の南端には焼土を含む小ピットがあり、埋設されていた土師器甕の抜取痕の可能性がある。カマドの残存幅は１ｍ、奥行は小ピットを含め90cmある。この小ピット間の中央部に径23cmの不整円形に焼面があり、更にこれを中心として径55cmの不整円形に焼面がある。この下には側壁端の小ピットに切られて長軸55cm、深さ12cmの焼土を堆積土とする浅いピットがある。側壁は焼土・炭化物を含む粘土質シルトで再構築されている。煙道は長さ3.45m、中央幅62cmで先端に「煙出し」ピットを

もつ。煙道は5.5°の角度で北方へ下降している。

ピット：柱穴痕の確認されないピットは住居跡内に32個検出され、この中に焼土・炭化物をかなり多く含むピット10・11・17・19及び小ピット５・16がある。深さ16～30cmと柱穴の確認されるピットより浅くピット11・17は長軸50cm前後、ピット10・19は長軸80cmと大きい。ピット17はカマドの東側、11は西に配される。17には火熱をうけて細かく剝離した須恵器甕№.9がつぶれるように遺存していた。ピット10は堆積土より土師器甕・坏の細片の他、ウォーターセパレーションの結果炭化米が検出されている。(49ページ参照)。ピット19堆積土からは、鉄製品が出土している。なお焼土の分布は、柱穴ピット１（これに切られるピット29には含まれない）や28にも含まれておりカマド周辺のピット全体の特徴である。

堆積土：１・２・３層は少量の炭化物・焼土を含むシルトでありカマドを除く住居内全域に堆積している。４層は灰黄褐色粘土質シルトで壁ぎわに堆積している。５～13層はカマドを中心とする堆積土で焼土・炭化物を多量に含む。６層は灰を多量に含む層である。

第５号溝

確認面は１号住居跡堆積土２層上面である。幅は210 cm（最大)、深さ80cm（最大)、方向は磁北より100°東に傾いている。断面形は底面が丸味を帯びU字形を呈するが中途から皿形に開く。堆積土は４層に分かれ１～３層はにぶい黄褐色シルト、最下層の４層は暗褐色の粘土質シルトで黄褐色の砂をブロック状に含む。底面は凹凸があるがやや西方へ傾斜している。遺物は堆積土１・２層より須恵器蓋片が出土しているが、１号住居跡出土片と接合しており住居跡に伴うと考えられる。時代は、１号住居跡の年代である８世紀前半以降で直上の基本層に灰白色火山灰がみられることから10世紀前葉以前である。堆積土、底面の傾斜から水が流れていたと考えられる。

その他の遺構

９層上面で検出した溝の中で、７・８・９・10号溝は、その規模、方向性等からいわゆる小溝状遺構群と呼ばれるもので畑に関る痕跡と考えられているもの[註]である。堆積土は褐色10ＹＲ4/4シルトである。６号溝は、５号溝に切られる幅30cm前後、深さ５～７cmの小溝である。堆積土は褐色10ＹＲ4/4シルトである。11・12・13号溝は一応溝としたが、性格は不明である。これらの遺構の年代は、８世紀前半以降10世紀前葉以前である。他に性格不明のピット多数がある。

註　田中則和「23．小溝状遺構群」『六反田遺跡発掘調査報告書』1981　仙台市教育委員会

(2) 遺　　物（1号住居跡）

土師器坏・甕・須恵器坏・甕・鉄製品（刀子など）、砥石に使われた可能性ある石が床面床面上のピット・周溝、堆積土などから出土した。復原実測可能土器11点、土師器坏片25点(内9点は1個体)、土師器甕片85点、須恵器坏片4点である。以下まとまった資料を得た土器について詳述する。

土器

〈出土状況〉

発掘調査時堆積土1・2・3層に土器片の集中個所がみられたため集中個所毎にPo1～Po42と番号をふりとりあげた。整理の結果接合して復原実測が可能となった土器は11点（№1～5、8～12、14）である。Po16は整理番号№1に合致し、Po17が№9に合致している外は、Po番号そのものは、復原個体そのものには一致しない。土器片集中部として把握したPo番号には複数の個体片が入りこんでいる。したがって共伴関係の検討は、接合した個体の個々の破片について行なった。これは損壊段階での共伴関係であり、使用時の共伴関係とはいいえない。

①接合関係の特徴

接合関係の空間的分布の特徴はA・Bに二大別できる。A：接合関係がほぼ一ヶ所に集中し、他の個体片をほとんど含まないもの。B：接合関係が住居跡北東部を範囲として分散しているもの。Aには、床面の直上層である堆積土3層に№1・3・9がある。№3の一部破片はピット1（柱穴）の確認面にのっている。№9はBに属する№8の上につぶれた様相でのっており、ピット17の埋り土の上面にのっている。Bは、カマド東側壁南端の東辺を出土位置の共通項としている。出土地点により更に細分するとB－1：煙道の底面・壁ぎわ出土破片をもつものを共通項とするものに№2、№8がある。B－2：カマドの南側約1.5 m四方に破片が散在するものに№4、5、10がある。15もこれに近いこれらはカマド東辺を主な分布範囲とすることで使用位置をある程度反映している可能性もあるがA、B－1の煙道とカマド周辺の両者に分布する特徴そしてB－2とAの関係(№9は№8の上につぶれたように存在する。)を考慮すれば住居跡の廃棄に伴う土器の廃棄の様相を示している可能性がある。

②個体の遺存状況

接合を試みた結果明らかとなった各個体の遺存状況について述べる。完形のものはない。

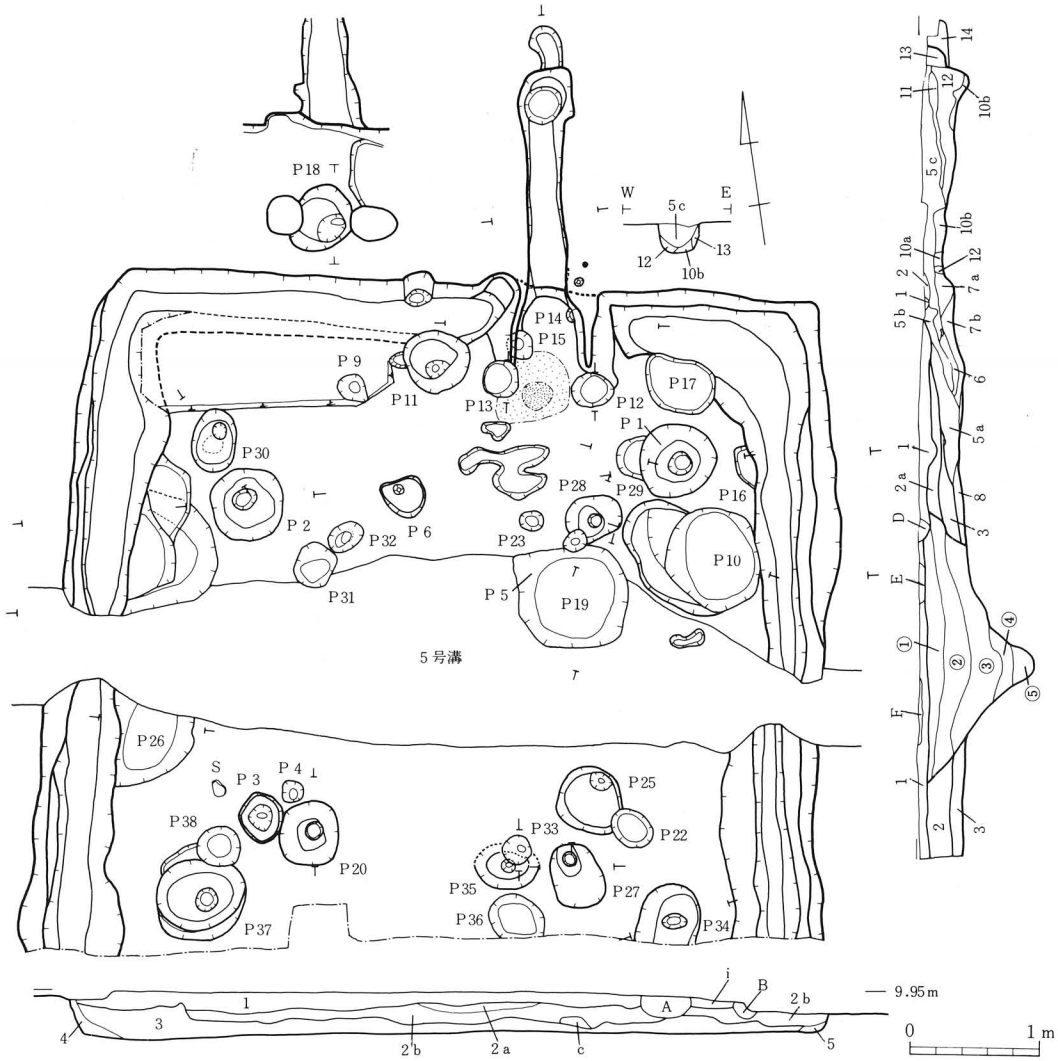
a：口縁部から底部まで復原できたもの（一部欠損）は№1と5であり3と10も欠損度が大であるがこれに近い。

b：口縁部から体上部のみ接合できたもの（一部欠損）は№2、4、9である。

c：下半部のみ接合できたものには№8がある。

d：器形の一部が復原できたもの。(No.16)

e：接合しないが同一個体と思われる破片（9点）よりなるもの。(No.15)



1号住居跡

層位	取上層位	土色	土性	備考
1	1	にぶい黄褐色 10YR 5/3	シルト	微量の炭化物を含む。
2a	2	暗褐色 10YR 3/4	シルト	粘性強い。
2b	3	暗褐色 10YR 3/4	シルト	炭化物を含む。
3	3	褐色 10YR 4/4	シルト	黄褐色の砂、部分的に焼土を斑点状に含む。
4	3	灰黄褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	炭化物を含む。
5a	6	暗褐色 10YR 3/4	シルト	炭化物、焼土を含む。
5b	7	暗褐色 10YR 3/4	シルト	炭化物多く、焼土(赤みのある黒褐色)を含む。
5c	8	暗褐色 10YR 3/3	シルト	炭化物、焼土少量含む。
6	9	にぶい黄橙色 10YR 7/2	灰	灰白色(10YR 8/1 シルト)の灰を多量に含む。焼土(橙色)を含む。
7a	10	暗褐色 10YR 3/4	シルト	焼土(赤褐色)
7b	11	暗褐色 10YR 3/3	シルト	焼土(橙色)
8	3	褐色 10YR 4/6	シルト	黄褐色の砂質シルトを含む。
9	12	黒褐色 10YR 2/3	シルト	焼土
10a	13	にぶい赤褐色 5YR 4/3	焼土	
10b	14	暗褐色 10YR 3/3	シルト	暗赤褐色(5YR 3/2)の焼土を多量に含む。
11	15	褐色 10YR 4/4	シルト	煙道堆積土
12	16	褐色 10YR 4/4	シルト	焼土(褐色・暗赤褐色)を含む。焼土を多く含む。煙道堆積土
13	17	褐色 10YR 4/4	シルト	煙道堆積土
14	18	暗褐色 10YR 3/4	シルト	

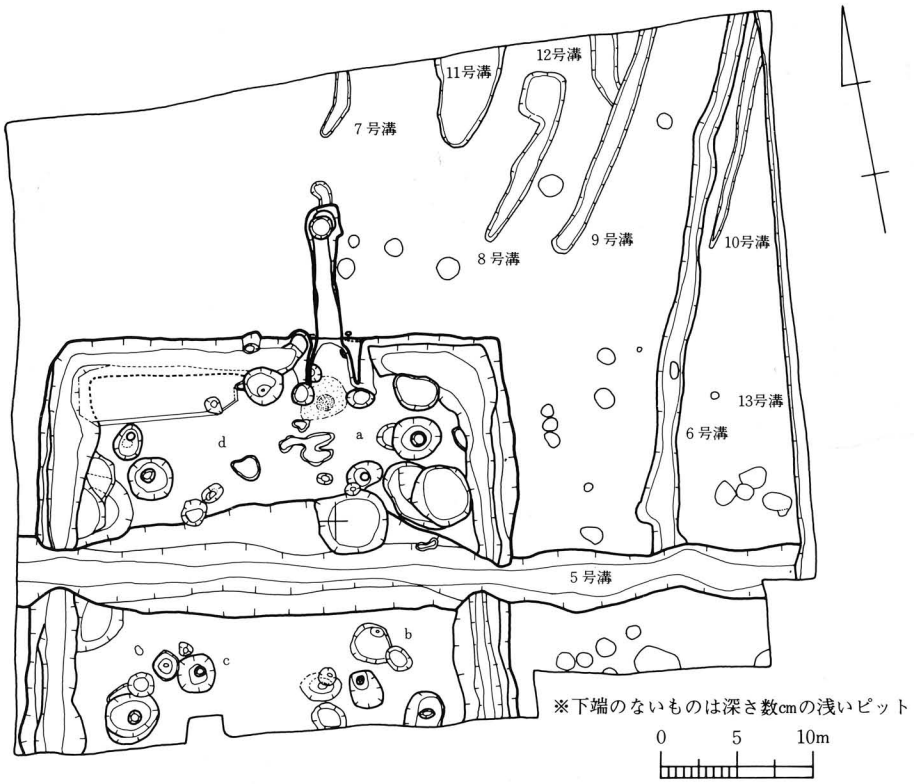
5号溝

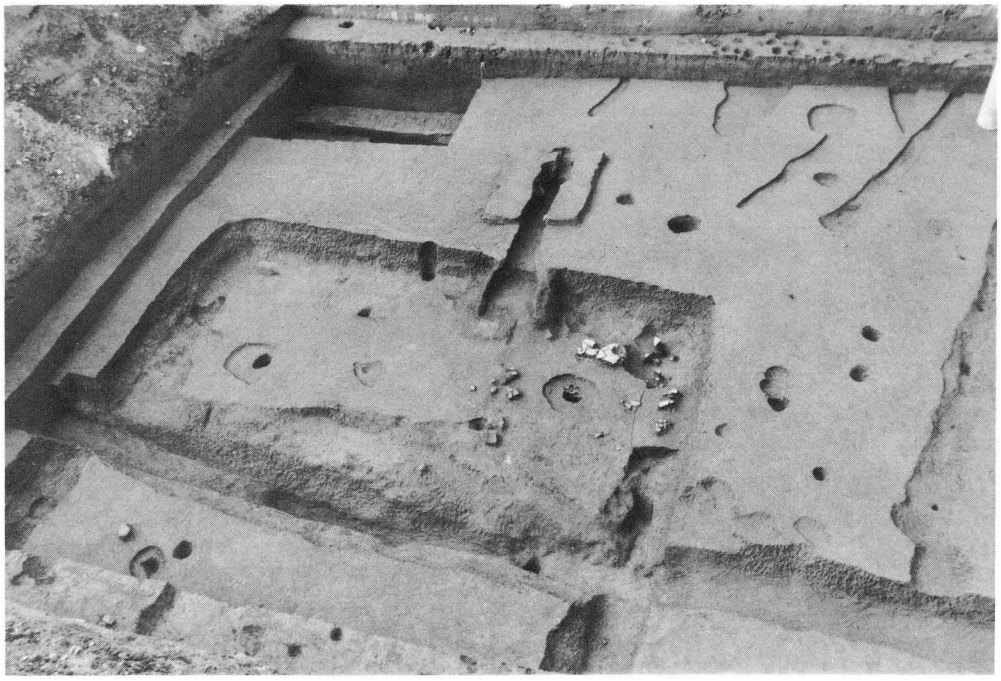
堆積土	土色	土性	備考
①	にぶい黄褐色 10YR 4/3	シルト	白色パミスを含む
②	にぶい黄褐色 10YR 4/3	シルト	白色パミスを含む
③	にぶい黄褐色 10YR 4/3	シルト	粘性強く、白色パミスを含む
④	にぶい黄褐色 10YR 5/4	シルト	炭化物、焼土を含む
⑤	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	黄褐色の砂をブロック状に含む

ピット・落込

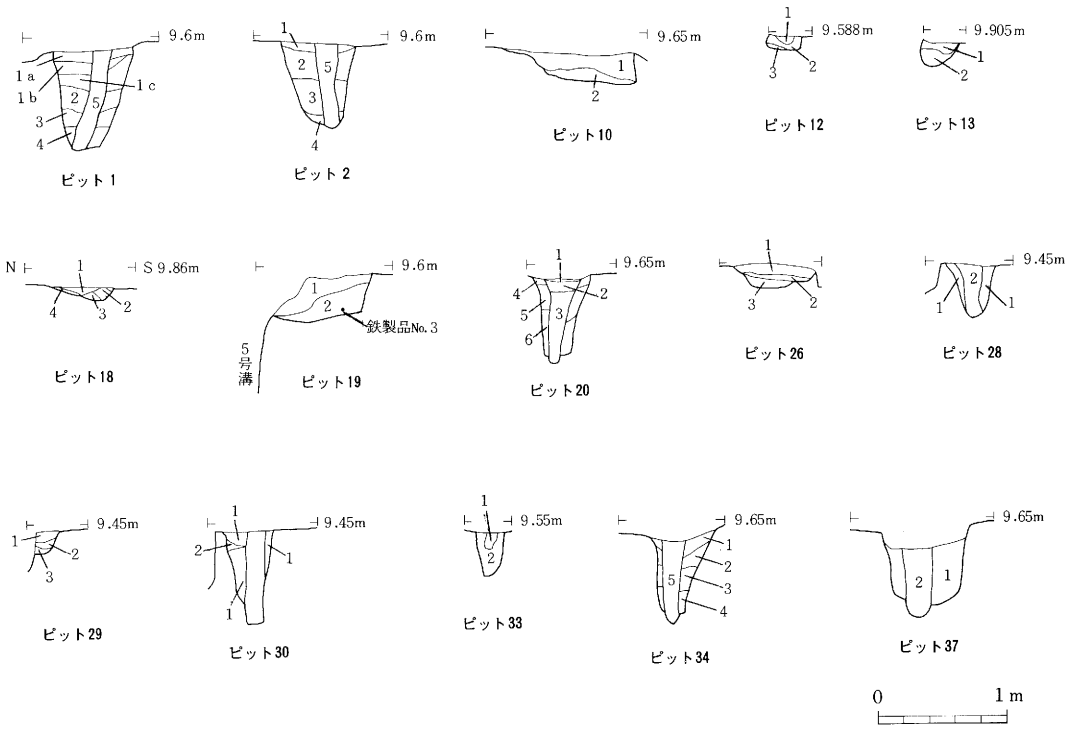
堆積土	土色	土性	備考
A	暗灰黄色 2.5Y 4/2	粘土質シルト	酸化鉄を多く含む
B	暗灰黄色 2.5Y 4/2	粘土質シルト	酸化鉄を多く含む
C	黒褐色 2.5Y 3/2	シルト	
D	暗褐色 10YR 3/4	シルト	灰白色火山灰を含む
E	灰黄褐色 10YR 4/2	シルト	
F	灰黄褐色 10YR 4/2	シルト	

第11図　第1号住居跡他





第12図　第９層上面住居跡検出面



ピット番号	1	2	3	4	5
平面形	ほぼ円形	ほぼ円形	不整円形	不整方形	不整円形
断面形	逆台形	逆台形	段	—	—
掘り方	長軸約60cm	長軸約55cm	長軸約40cm	長軸約16cm	長軸約20cm
柱穴	約15cm前後	径14cm(下部)	—	—	—
深さ	掘り方88cm　柱　穴88cm	掘り方73cm　柱　穴78cm	15cm	15cm	8 cm
堆積土	(掘り方) 1a.1b.1c. 暗褐色　10YR3/3　シルト 焼土、炭化物を少量含む 2．黒褐色　10YR3/2　粘土質シルト 焼土、炭化物を若干含む 3．暗褐色　10YR3/4　粘土質シルト 焼土、炭化物を若干含む 4．暗褐色　10YR3/3　シルト 焼土を若干含む (柱　穴) 5．褐色　10YR4/4　粘土質シルト	(掘り方) 1．黒褐色　10YR3/2　シルト 砂を霜ふり状に含む 2．黒褐色　10YR3/3　シルト 砂を霜ふり状に含む 3．褐色　10YR4/4　粘土質シルト 砂を1、2より少なく混入 4．暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト (柱　穴) 5．褐色　10YR4/4　粘土質シルト	褐色　10YR4/4　シルト	褐色　10YR3/4　粘土質シルト	暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト 炭化物、焼土を含む
備考	上部が東側に傾いている。焼土の混入から建替の可能性あり。「掘り方」より土師器坏No.14同甕体部片3点 柱穴より土師器甕体部片4点	—	—	—	—

ピット番号	6	9	10	11	12
平面形	不整形	不整形	不整長円形	不整円形	円　形
断面形	内部に小ピットあり	—	—	二　段	—
掘り方	長軸38cm	長軸26cm	長軸80cm　短軸75cm	最大長50cm　小ピットの上端18cm	径28cm
柱穴	—	—	—	—	—
深さ	9 cm	28cm	26.5cm	1段：16cm　2段：23cm	16cm
堆積土 (・遺物)	焼土、炭化物、砂を霜ふり状に含む	暗褐色　10YR3/3　シルト	1．暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト 焼土、炭化物を多く含む 黄褐色の砂混入 2．褐色　10YR4/4　砂質シルト 焼土、炭化物を少量含む 黄褐色の砂混入 ゆるやかに右方向に傾斜 ・堆積土2層より土師器甕No.10(破片) ・土師器甕口縁部片1点、体部片15点 ・土師器坏口縁部片1点、体部片1点 ・土師器？1点	褐色　10YR4/4　シルト 焼土、炭化物を多量に含む ・堆積土より土師器坏No.15(破片)	1．暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト 焼土、炭化物を多量に含む 2．暗褐色　10YR3/3　シルト 砂る含む。焼土、炭化物を少量含む 3．にぶい黄褐色　10YR5/3　シルト 質砂
備考	—	—	—	—	—

ピット番号	13	14	15	16	17
平面形	不整円形	不整楕円形	不整円形	不整円形　周溝に切られる	不整長方形
断面形	—	—	—	—	—
掘り方	長軸35cm	長軸10cm	長軸22cm	残存長軸30cm	長軸58cm
柱穴	—	—	—	—	—
深さ	13.5cm	4 cm	4.5 cm	7 cm	18cm
堆積土（・遺物）	1．褐色　10YR4/4　シルト 焼土、炭化物を多量に含む 2．褐色　10YR4/4　砂質シルト 焼土、炭化物を少量含む	褐灰色　10YR5/1　粘土質シルト 焼土、炭化物を含む	褐灰色　10YR5/1　粘土質シルト 焼土、炭化物を含む	褐灰色　10YR5/1　シルト質粘土 焼土、炭化物を含む	褐色　10YR4/4　シルト 焼土、炭化物、灰を多量に含む 黄褐色の砂を含む ・土師器甕No.16同1点No.15（両者共破片）

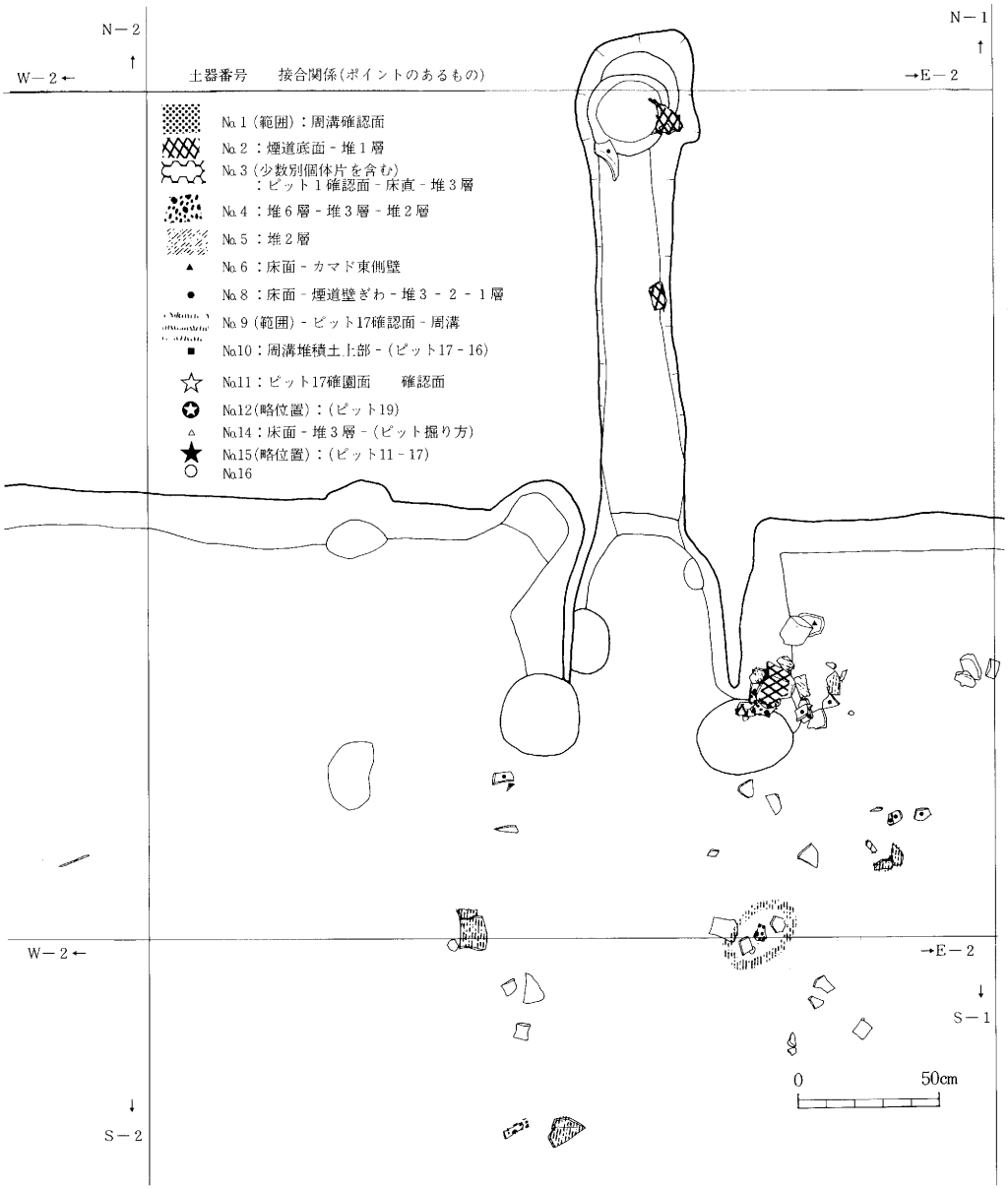
ピット番号	18	19	20	22	25
平面形	不整円形　ピット12に切られる	不整隅丸方形　両側は5号溝で切られている	不整隅丸方形	不整楕円形	不整円形
断面形	—	—	逆台形（二段）	—	北側に小ピットあり
掘り方	長軸54cm	長軸68cm	長軸50cm	長軸35cm　短軸27cm	長軸50cm
柱穴	—	—	8 cm（下部）　17cm（中位）	—	小ピットの長軸17cm
深さ	—	37cm	柱　穴74cm　掘り方68cm	8 cm	小ピット：18.6cm　大ピット：9.5 cm
堆積土	1．褐色　7.5YR4/3　粘土質シルト 焼けている 2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂 上部熱変化 3．にぶい黄褐色　10YR5/3　粘土質シルト 4．暗褐色　10YR3/4　シルト	1．暗褐色　10YR3/3　シルト 焼土、炭化物を含む。黄褐色の砂を多く含む 2．暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト 焼土、炭化物を含む。黄褐色の砂を少し含む ・堆積土より土師器1点No.12鉄製品No.3	（掘り方）※掘り方より柱穴が深い 1．暗褐色　10YR3/3　シルト 黄褐色の砂をブロック状に含む 2．明黄褐色　10YR6/6　砂質シルト 暗褐色（10YR3/3）シルトと混じりあう 3．にぶい黄褐色　10YR5/3　粘土質 明黄褐色砂と混じりあう　シルト （柱　穴） 4．暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト 黄褐色の砂がブロック状に混じる 5．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂 4をブロック状に含む 6．暗褐色　10YR3/3　シルト質粘土 黄褐色の砂を含む	暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト 黄褐色の砂を霜ふり状に含む	暗褐色　10YR3/3　シルト質粘土 全体的に砂を含む
備考	—	—		—	—

ピット番号	26	27	28	29	30
平面形	不整円形　5号溝に切られる。	不整楕円形	不整円形　ピット5に切られる	不整円形か、ピット1に切られる	不整楕円形（南北）
断面形	逆台形（二段）	—	U字形	—	U字形
掘り方	a．bを含めると長軸230 cm	長軸54cm　短軸40cm	長軸47cm　短軸37cm	—	長軸50cm　短軸35cm
柱穴	—	径約10cm	下端16cm	—	推定15cm
深さ	a：21.5cm　b：19.5cm	柱　穴69cm　掘り方67cm	67cm	46cm	柱　穴96cm　掘り方78cm
堆積土	1．にぶい黄褐色　10YR5/3　シルト 黄褐色の砂を少量含む 2．暗褐色　10YR3/3 黄褐色の砂を多く含む 3．暗褐色　10YR3/4　粘土質シルト 黄褐色の砂を少量と黒褐色（10YR3/3）の粘土をブロック状に含む	（掘り方） 1．褐色　10YR5/4　シルト　砂がまじる 2．褐色　10YR5/4　粘土質シルト 3．褐色　10YR5/4　粘土質シルト 暗灰黄色（2.5Y5/3）の粘土ブロックを含む 4．にぶい黄色　2.5Y5/3　砂 5．暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト （柱　穴） 暗褐色　10YR3/3　シルト質粘土	1．暗褐色　10YR3/3　シルト質粘土 焼土、炭化物、砂のブロックを含む 2．褐色　10YR5/4　粘土質シルト 焼土、炭化物を含む	1．褐色　10YR5/4　シルト質粘土 炭化物、砂を含む 2．暗褐色　10YR3/3　砂質シルト 砂を含む 3．暗褐色　10YR3/3　シルト シルト質粘土のブロックを含む	（掘り方） 1．暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト 酸化物、焼土、砂を含む 2．褐色　10YR5/4　粘土質シルト （柱　穴） 褐色　10YR4/4　シルト質粘土

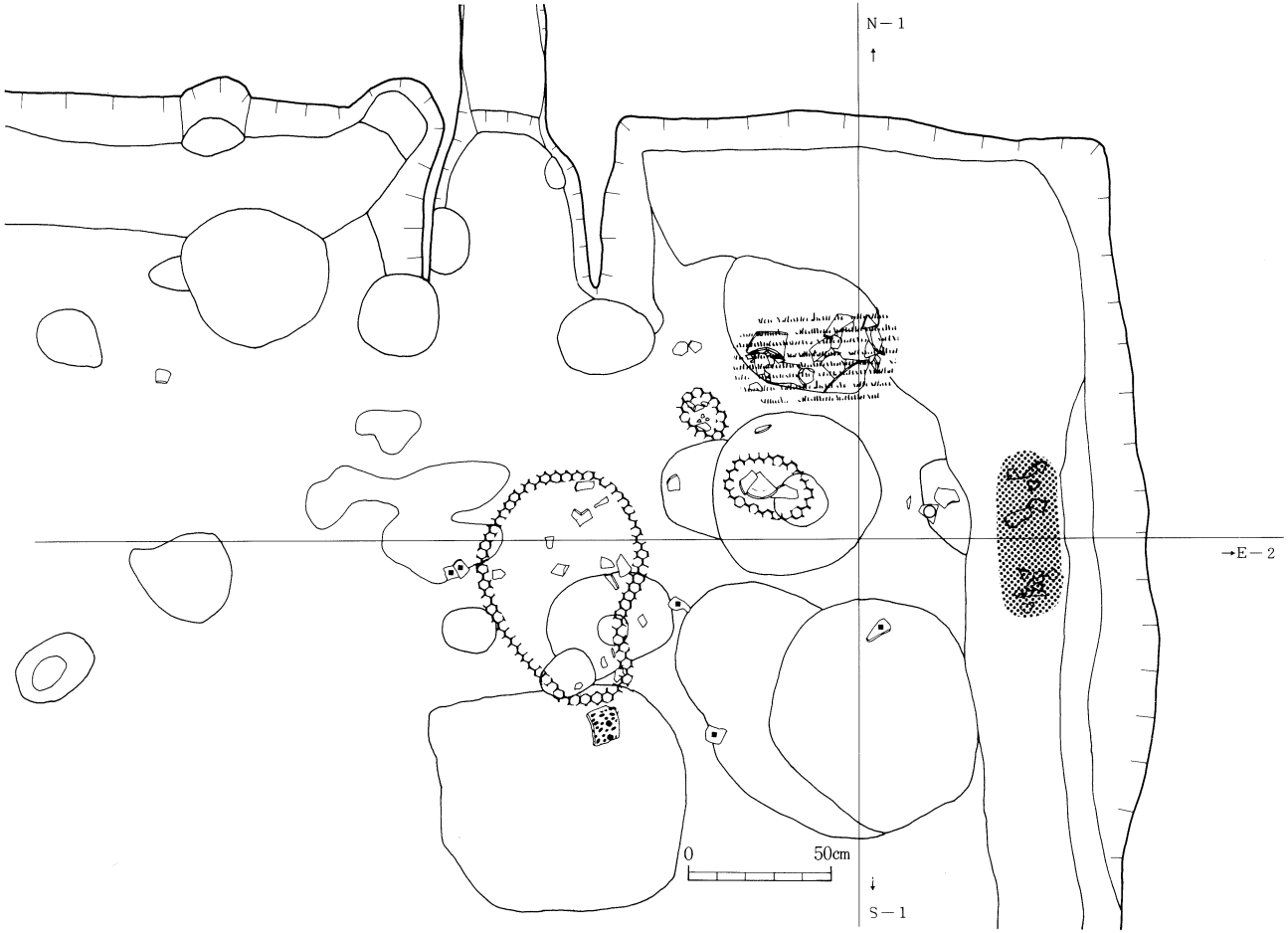
ピット番号	31	32	33	34	35
平面形	不整方形	不整楕円形	円　形	不整楕円形	不整楕円形（東西）ピット33に切られる
断面形	—	段あり	—	段（柱穴の先端は尖っている）	段（中央に小ピットあり）
掘り方	長軸34cm	長軸30cm　短軸21cm	径24cm	—	長軸50cm　短軸推定35cm
柱穴	—	—	—	13cm（中位）　10cm（下部―掘り方底部）	—
深さ	42cm	36cm	57cm	柱　穴78cm　掘り方67cm	小ピット18cm　他12cm
堆積土	暗褐色　10YR3/3　シルト	（中央部） 2．褐色　10YR5/4　シルト （外　辺） 1．暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト	（中央部） 2．灰黄褐色 10YR5/2 粘土質シルト （外　辺） 1．暗褐色　10YR3/3　シルト	1．暗褐色　10YR3/3　シルト質粘土 黄色褐色の砂を含む 2．暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト 黄色褐色の砂を多量に含む 3．にぶい黄褐色 10YR5/3 粘土質シルト 黄褐色の砂を少量含む 4．黒褐色　10YR3/3　粘土質シルト 黄褐色の砂を含む 5．黒褐色　10YR3/3　粘土質シルト	黒褐色　10YR3/3　シルト
備考	—	柱穴の可能性あるが最終的に確認はできなかった。	柱痕かどうか不明	—	—

ピット番号	36	37	38	39
平面形	不整円形	不整円形　ピット38に切られる	不整円形　ピット37を切る	—
断面形	—	二　段	—	—
掘り方	46cm（東西）	長軸75cm　短軸65cm	径33cm	—
柱穴	—	中位20cm	—	—
深さ	10cm	柱　穴73cm　掘り方60cm	51.5cm	—
堆積土	黒褐色　10YR3/2　シルト	（掘り方） 1．暗褐色　10YR3/4　シルト 黄褐色の砂を霜ふり状に含む （柱　穴） 2．暗褐色　10YR3/4　シルト	暗褐色　10YR3/3　粘土質シルト 黄褐色の砂と灰色のシルト質粘土を少量含む	にぶい黄褐色　10YR5/4　シルト質粘土
備考	—	掘り方より柱穴が深い	—	壁柱穴

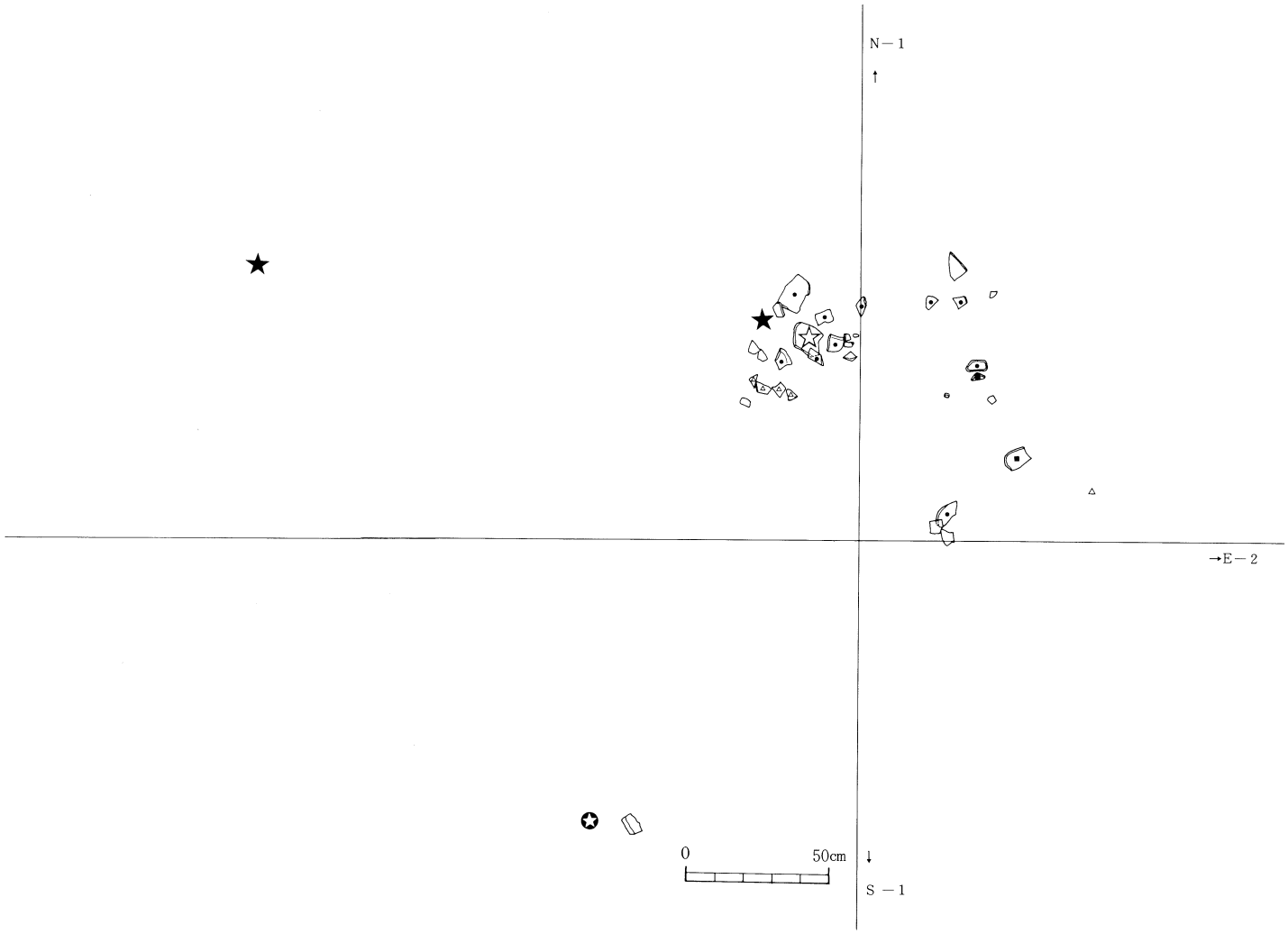
第4表　第1号住居跡ピット(2)



第13図　第1号住居跡遺物出土状況(1)



第14図　第１号住居跡遺物出土状況(2)



第15図　第１号住居跡遺物出土状況図(3)

aには接合関係A（接合関係をもつものがほぼ一ヶ所に集中し他の破片をほとんど含まないもの）に属するもの№1、3を含む。しかし共通していえることは、№1を除き破損度が大きい。

次にこれらの遺物群に特徴的なことは火熱をうけていることである。土師器は赤変し器壁（主として外面）がボロボロになっている。須恵器は№9において細かく剝離し部分的には分解している。ただし須恵器坏№13（小片）、内外面ナデ調整の土師器坏№14は肉眼では確認できなかった。又土師器№16(接合しない破片9点)は、内黒処理が大部分残存している。

上半部のみ残存している№2と4はいずれも片側及び残存部下端に強い火熱をうけている。両者は、器形も近似しておりカマド両側壁南端のピットに逆位に埋設されていた可能性もある。№8は接合破片の一部が煙道底面から出土しているものであるが、接合破片毎に火熱の受ける程度が異なり、かつ他の甕の火熱の受け方と異なり損壊後火熱をうけたことを示している。しかし№8以外の復原実測可能土器(1・2・3・4・5・9・10)は、接合部位の全面に、熱変化の範囲が観察され、損壊以前に火熱のうけていることが判明する。№3・5の土師器甕は、片側が強い火熱をうけボロボロになっている。№1の土師器坏は、底部が剝落し内面の黒色処理が全てとんでいる。（後述するように外面の黒色処理もとんだ可能性がある。）

本住居跡の床面には、顕著な炭化材は認められないが、堆積土には相当量の焼土・炭化物が含まれている。これらの№8を除く土器は、一度に、恐らく火災（意識的か過失かは別として）による熱をうけた後、住居跡の廃棄に伴い損壊・廃棄された可能性が高い。

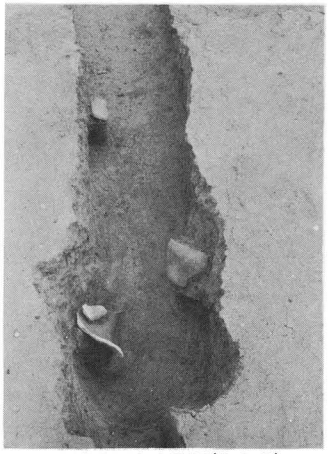
③層位的位置による住居跡との関連

Ⅰ．柱穴掘り方、床面、床面直上、カマド・煙道底面・堆積土下層（多量の焼土を含む6・7・8層）より出土した土器(片)は、層位学的かつ接合関係(第6表A)からみて本住居跡の廃棄時期に最も近いと考えられる。――№2～4、6、8、10、13～15・16

Ⅱ．周溝堆積土・確認面、床面上のピット（柱穴以外）堆積土・確認面、堆積土3層より出土した土器(片)は層位学的にはⅠより後出的要素をもつが、下記の共伴関係によりⅠと同様本住居跡廃棄時期に最も近いと考えられる。即ち№9はピット17確認面と周溝堆積土でⅠの№8と共伴している。№11はピット17確認面でⅠの№8、9と共伴している。№12は堆積土3層で№1～3、4、8、10、14と共伴している。―№1、9、11、12

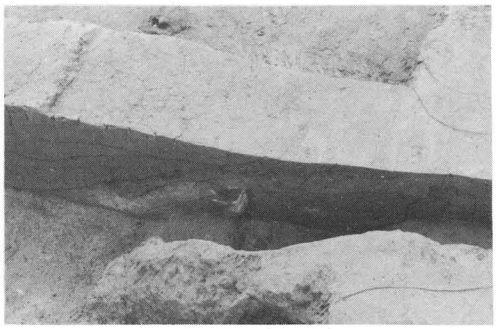
Ⅲ．堆積土2層より出土しⅠ・Ⅱとの共伴関係がないものに№5がある。

しかし、②で述べたように、№8を除く復原実測可能土器は、№5を含め相似た火熱を受けた痕跡をもっており、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは本来共伴関係にある可能性が高い。（後述の編年的検討参照）



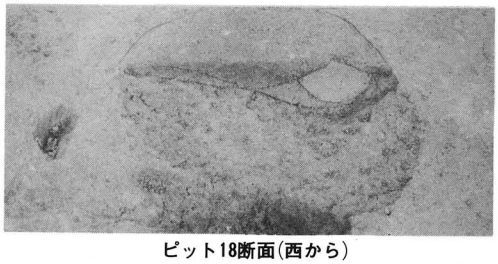
煙道土器出土状況(北から)

カマド・煙道(南から)



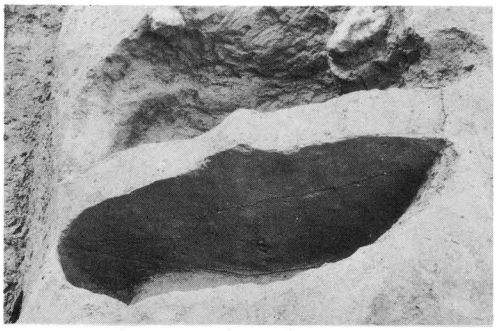
カマド断面(東から)

ピット10断面(北から)



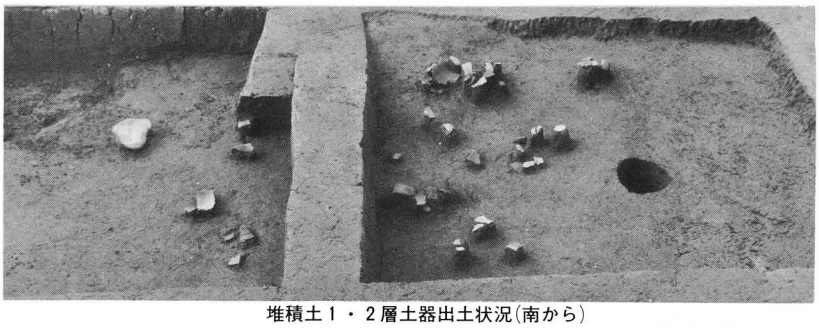
ピット18断面(西から)

ピット19(南から)



ピット19断面(東から)・鉄製品No. 3

写真2　第1号住居跡(1)



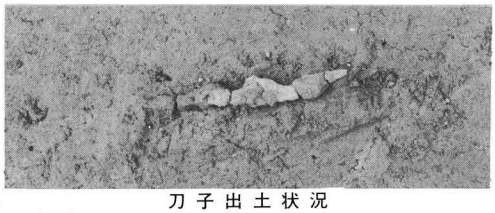
堆積土１・２層土器出土状況(南から)

ａ区床直遺物出土状況(東から)

土師器(No.１)出土状況(周溝堆積土上面)

カマド東脇土器出土状況

須恵器(No.９)出土状況(ピット17確認面)

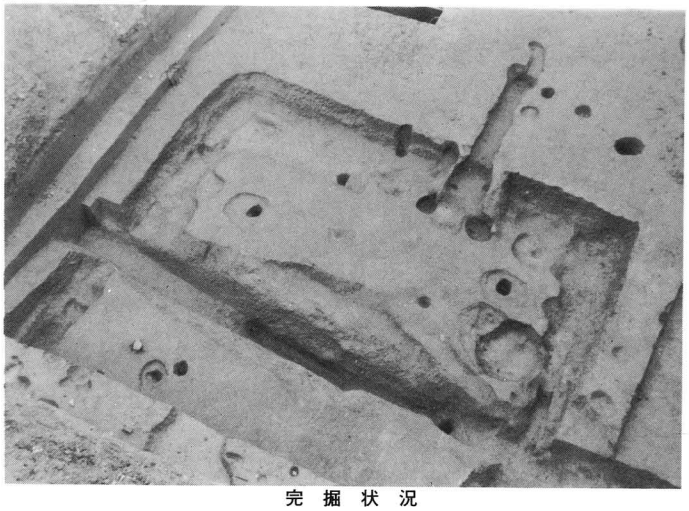


刀子出土状況

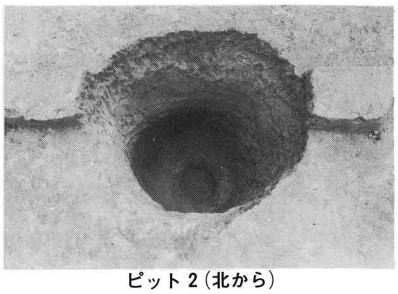
写真３　第１号住居跡(2)遺物出土状況

調 査 風 景

遺 物 出 土 状 況

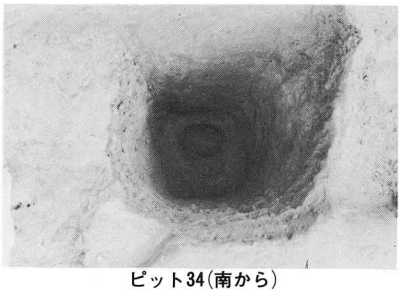


完 掘 状 況

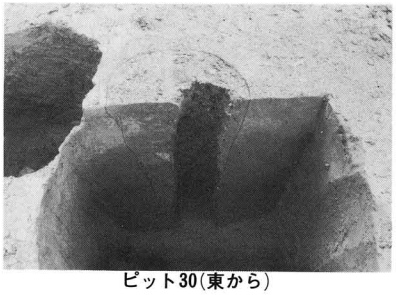


ピット 2 (北から)

ピット34断面(南から)



ピット34(南から)



ピット30(東から)

ピット37断面(北から)

写真 4　第 1 号住居跡(3)

(3) 遺物の分類と検討（第17図)(類例：第16図)

1号住居跡から比較的豊富な土器が出土している。これらは土師器坏Ⅰ～Ⅲ類・甕Ⅰ～Ⅴ類須恵器坏、須恵器甕に分類できる。これらは①②③の検討により共伴関係にあると考えられるが、従来このような組合せの良好な例が知られていないので個々の土器について検討してゆきたい。

土師器

坏Ⅰ類　外面に沈線がめぐり軽い段を形成し内面もこれに対応して屈曲する特徴をもつ。

ⅠA類：口縁部から体部にかけてやや内弯し、沈線がめぐり下端に軽い段を形成する。この沈線に対応して内面にも微弱な凹線がめぐった後、屈曲する。外面の沈線の上方は横ナデ、下はヘラケズリである。内面は、黒色処理が火熱により消去している。ⅠB類と同様の調整であるが、ⅠB類より浅い。平底風の丸底である。（No.12)

類例は、全く同一のものは見い出せなかったが、器形・法量・調整の上で近似するものは、宮城県古川市名生館遺跡SⅠ175住居跡出土土器がある。[1] 本遺跡例にみられる沈線や内面の屈曲は、実測図に表現されていない。年代は共伴する須恵器坏が多賀城の創建瓦を焼成した日の出山窯跡や木戸窯跡出土のものと類似していることから8世紀前半と推定されている。なお、御駒堂遺跡1・36号住居跡出土のもの[2]は、比較的近似しているが本遺跡例と異なり、外面段の直上が軽く外反する特徴をもち、本遺跡例が口径14.6cmなのに対し後者は口径は16～17cmと大型である。この土器が属する2群土器は、同群土器を主体的に構成する真間式糸土器の関東の研究者の見解に基づく年代から8世紀前半としている。ここでは名生館遺跡（官衙跡）出土の類似例から8世紀前半としたい。

ⅠB類（No.15)

ⅠA類と同様に外面に沈線がめぐりその下端に軽い段を形成する。内面には、段に対応して軽い凹線がめぐりこの下段から屈曲している。段から上は横ナデ、下はヘラケズリである。ⅠA類と異なり口縁部から体部の角度が急であり、1/8の小片のため不正確であるが口径は、19cmを計る。復原要素が大きいため他遺跡との比較検討は、困難であるが前述した御駒堂遺跡2群土器には、深い器形も存在している。

Ⅱ類（No.1）

口唇部が軽く外反する傾斜の比較的急な口縁部から体部が稜線を形成して丸底に至るもので内外面ミガキで内面は黒色処理が火熱により消失しており、後述する例から外面も黒色処理されていた可能性がある。類例は、前述の名生館遺跡SD179溝跡出土のⅠBⅠ類が[1]あり、本遺跡例よりやや小ぶりながら器形・調整共によく似ている。ただし内外面黒色処理がされている。中世の溝跡出土のため本来の帰属位置が不明であり今後の

良好な出土状況例が期待される。器形的には山ノ上遺跡１号住居跡[3]出土のものが、やや近似しているが口唇部が外反し、内面ナデ調整の点が異なる。

なお、器形的には、８世紀前半に位置づけられる須恵器坏で長根窯跡坏Ⅲ類[4]や日の出山窯跡に近似しており、同様の器形が従来報告例が少ないことを考慮すれば、同時期の「須恵器坏の模彷」も可能性の一つとしてあげられる。

Ⅲ類（№14）

口縁部から体部はやや外反ぎみに外傾し平底風の丸底である。外面の口縁部から体部調整は横ナデ、底面は手持ヘラケズリ、内面の口縁部から底部周縁は横ナデ、中央付近はヘラミガキである。胎土に砂粒を多く（径６mmの灰白色粒を含む）含み粗い。

内面が横ナデ調整し赤彩するものが多いこの種の坏は近年御駒堂遺跡[2]・山ノ上遺跡[3]・原前南遺跡[5]・名生館遺跡[1]等で出土している。これらの中で実測図上の比較ではあるが、比較的近似するものに御駒堂遺跡３・34号住居跡出土のものがある。後者は平底で両者共口径17cm台と本遺跡に比して大ぶりである。前者は口唇内面に沈線、内外丹彩と関東例そのものである。名生館遺跡ＳＩ175住居跡１層出土土器（第16図５）は体部と底部の境が本遺跡例よりやや不明瞭であり、外面の手持ヘラケズリの位置も本遺跡例よりやや高く、今後の出土例の増加を待って改ためて検討したい。後述するようにこの住居跡の土器のセットは、本住居跡の土器のセットに近似している。（第16図参照）
又御駒堂遺跡第29・39号住居跡の内面ナデ調整の坏は、内外面の体部から底部への移行部はやはり本遺跡例に比して丸味をもち、名生館遺跡例も壁が肥厚している。

したがって本遺跡はいわゆる真間式糸に近いが、県内では同一の器形・法量・調整のものを見いだせないため、関東の該期の資料との比較検討を不十分ながら試みた。

東京都練馬区郷土資料調査員の小金井靖氏、東京都教育委員会の福田健司氏よりは、「南武蔵を中心として分布する盤状坏[6]に非常によく似ている。」との御教示を頂いた。但し小金井氏からは、「口縁部から体部の長さが前者より短かく、胎土も前者に比して悪い」との御指摘を頂いた。高橋一夫氏・宮昌之氏（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）・服部敬史氏（八王寺市教育委員会）は断定を避けられた。又、八王子市立郷土資料館にて小川貴司氏より中田遺跡の「盤状坏」を見せて頂き下記の点を同氏と共に確認した。

①器形は近似している。平底が多いが平底ぎみの丸底もある。口縁部から体部の長さ（高さ）は、本遺跡例に比してやや長いものが多い。内面の体部と底部の境は本遺跡例より鋭角的に屈曲するものが多いが、近似する例もある。

②口縁部から体部の内外面の調整は、ロクロ調整であるが、本遺跡例はナデの「上がり」が認められる「横ナデ」である。但し回転台を使用している可能性はある。

③基本的には内外赤彩であるが、本遺跡例は火熱をうけた可能性はあるものの赤彩は認められない。

④胎土は精選されており本遺跡とは異なる。

したがって中田遺跡の「盤状坏」に近似するが細部において異なる点が多い。又、今後南武蔵の諸例相模・下総等との比較検討が必要である。現段階では南武蔵を中心として分布する盤状坏の影響を強くうけている可能性が高いとしておきたい。

この盤状坏は、南武蔵における福田健司氏の編年では、Ⅱ・Ⅲ期－8世紀第2四半期以降741年（国分寺造営の詔）[7]、相模の國平健三氏の編年では、Ⅱ・Ⅲ期－Ⅱ期715年Ⅲ期725～740年[7]である。盤状坏の編年は未だ確定的なものではないが、仙台市郡山遺跡（官衙跡）のように7世紀後半～8世紀前葉期における中央との直接的な結びつき[9]を考慮するなら、8世紀初頭を除く前葉から中葉の幅でとらえられると考える。

高坏（No.11）

坏部のみの残存で、沈線の上は横ナデ、下はヘラケズリ（放射状）である。内面はゆるやかに内弯する。残存末端より高坏とした。

註　横穴古墳では三本木町混内山4～7号墳に近似例がある。

甕

甕は、口縁部から胴部の形態でⅠ～Ⅳ類に分けられ、胴下部の形態で第Ⅴ類を加えた。Ⅴ類はⅠ類の胴下部に接続する可能性がある。Ⅰ～Ⅴ類に共通する特徴は外面の調整が縦位刷毛目である点である。

Ⅰ類：外反する口縁部に比較的長い胴がつくものである。頸部の段や胴部のふくらみの形態からA・B類に分類した。

ⅠA類（No.2）

口縁部外反し頸部に沈線状の段がめぐり胴部の最大径は、上半にあり、口径とほぼ同じである。胴上部は縦位刷毛目調整である。類例は観音沢遺跡第7号住居跡第15図2、9号住居跡第18図1[8]、仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙跡に属するSE429井戸跡第11図7[9]、塩沢北遺跡1号住居跡第5図5[10]がある。御駒堂遺跡では、ただ1点のみであるが、観音沢遺跡の伴出須恵器が「清水・郡山遺跡で確認された（御駒堂遺跡）第1群段階の須恵器の組成には含まれておらず、それよりは新しい段階のものとみられることにより」第2群土器（8世紀前半）としている。しかし塩沢北遺跡1号住居跡は8世紀初頭頃としているが、仙台市郡山遺跡第Ⅰ期官衙跡に属するSⅠ412住居跡床面出土須恵器（報文第20図3）に酷似するものが1号住居跡床面出土で出土しており、第Ⅱ期官衙が7世紀末葉～8世紀前葉とする現段階の成果[9]では、塩沢北遺跡1号住居跡も7世紀末葉までさかのぼる可能性をもっている。したがって本土器も7世紀末葉から8世紀前半の幅をもつ

土器といえよう。

ⅠB類（No.4）

口縁部が外反し、頸部に段を形成しない。胴部はⅠA類と異なり上半部にある最大径が、口径まで達せずしだいにすぼまるものである。器形は塩沢北遺跡1号住居跡第6図1に似るが頸部に段がある点が異なる。又前述の郡山遺跡Ⅱ期官衙跡に属するSE429井戸跡第11図17に近似する。ただしこれは外面調整がヘラケズリで一部がナデである。以上から8世紀前半を中心とする年代におさまる。

Ⅱ類（No.10）

外傾する口縁部に球形の胴部がつくもの。最大径は胴部中央にある。口縁部は横ナデ調整、胴上部は、縦位刷毛目調整である。類例は郡山遺跡Ⅱ期官衙跡SE429井戸跡第13図2、第11図6にある（8世紀前半）。名生館遺跡SⅠ175住居跡第15図7に似るが最大径がやや上で胴部調整は不明である（「8世紀前半」）近似する例に御駒堂遺跡20号住居跡第49図9がある（第Ⅰ群土器。「7世紀末葉～8世紀初め」）。塩沢北遺跡2号住居第10図7はやや近似するが頸部に段がある点で異る（7世紀末葉～8世紀初頭）以上により7世紀末葉から8世紀前半の幅でとらえておきたい。

Ⅲ類（壺型）（No.5）

胴中央部に最大径をもつ。短かく外反する口縁部に胴張りのやや長めの胴部をもつ。体部調整は部分的に縦位刷毛目が残存しているが全体としてはナデに近い。

類例は乏しく仙台市郡山遺跡SE429井戸跡第12図9及び第13図10が近似しているのみである。ただし本遺跡例ほど口縁部は短かくない。

郡山遺跡SE429井戸跡4・5層出土土器は、後述するようにⅡ期官衙跡でも後半と考えられ、8世紀前半とされているので本遺跡例も8世紀前半の幅でとらえておきたい。

Ⅳ類（鉢型）（No.3）

口縁部が内弯し頸部を形成せずにすぼまるいわゆる鉢型を呈する。口縁部と胴部の境には、沈線状の段がある。外面調整は縦位刷毛目である。

類例は乏しく比較的近似するものに、栗遺跡Ⅲb期土器群鉢Ⅰ類[12]、名生館遺跡SI175住居跡第15図6、SⅠ168住居跡第12図3[1]、仙台市郡山遺跡SE429井戸跡第13図16があるが、栗遺跡例は、器高と最大径の比において最大径が広くずんぐりしている。名生館遺跡例は器形の点で後者は近似している。但し両者とも外面の調整はヘラケズリである。郡山例は口唇部が外反ぎみで外面の調整ではヘラケズリである。したがって本類に近似するものは、栗囲式期（7世紀）から8世紀前半に存在する。共伴関係の上では8世紀前半に位置づけられる。器形、外面調整からみれば栗囲式の系譜をひき、現段階で

は名生館遺跡以南に分布している。

Ⅴ類（No.８）

胴下半部のみであるが、下半部がふくらむ特徴的な器形からⅤ類を設けた。外面調整は縦位刷毛目である。類例は郡山遺跡Ⅱ期官衙跡ＳＥ429井戸跡第13図７がある。又塩沢北遺跡１号住居跡第５図７、栗遺跡Ⅱ・Ⅲ期[2]に伴う甕に近似しているが、本遺跡例に比して胴部下端が丸味をもっている。したがって胴下半部がふくらむ特徴をもつ甕は栗囲式期（７世紀）から８世紀前半にわたって存在するが、本遺跡例は郡山遺跡ＳＥ429井戸跡出土土器との類似から８世紀前半の年代が考えられる。

須恵器甕（No.９）

外反する口縁部の縁帯の断面形が鋭い三角形を呈し肩の張る器形である。外面は、平行叩き目（木目と直交）で内面は同心円状当て目であり、外面の叩き目を切る凹線と、縁帯･頸部のクシ描き波状文が特徴である。類例は非常に乏しく、肩の張る器形、法量そして外面に凹線状の調整がめぐる点では、名生館遺跡ＳⅠ173住居跡第14図３[1]に近似している。同例は前述した理由から８世紀前半の年代を与えられている。

坏（No.13）

底部細片のため回転ヘラ切り無調整以外の特徴は不明である。(「７．検討課題」参照)

土器の編年的位置

(1)　８世紀前半の土師器との比較

８世紀前半を前後する土師器の型式には、氏家和典氏により設定された栗囲式[13]・同Ⅱ類[14]、国分寺下層式[15]がある。

栗囲式は丸底で段の上が外反する坏により特徴づけられており、甕Ⅳ・Ⅴ類において甕同士に近似性があるものの坏において本遺跡例とは基本的に異なった特徴をもっている。

栗囲式Ⅱ類は坏のみの説明がなされており「体部と底部の接点において、外傾では稜線を、内側ではその部分で曲折する特殊な変化を示すもの」で「奈良時代前期に中心をおくべき」とされている。本例の坏Ⅰ類は、栗囲式Ⅱ類設定の是非は別としてこの内容に相当する。

国分寺下層式は坏において第Ⅰ類：坏腹部外壁に軽い段を形成し、これに対応する器内壁に特に識別できるような変化をもたないもの。第Ⅱ類：第Ⅰ類にみられた段が底部近くに移行したとみられるもの。第Ⅲ類：内反気味の口縁部からそのまま底部に接続するもので識別しうる一線を画していない丸底のものである。

現在、栗囲式から国分寺下層式については、２通りの扱い方がなされている。栗囲式Ⅱ類について型式として設定するには、坏以外の器種についても内容が明らかにされていない等十分な型式成立要件を備えていないことはすでに指摘された通りである。[2] 又、国分寺下層式

は、国分寺創建の詔(741年)を遡り得ない。それ故多賀城跡調査研究所では8世紀前半の土器をも栗囲式と総称している[1]。又、県教育委員会では、以上の理由に加え、古墳時代と奈良時代の土器を区別する方が有効と考え、国分寺下層式を奈良時代と捉え、8世紀前半の土器については、宮城県北と県南の地域差から「国分寺下層式」の呼称を保留している[2]。本書ではこのような状況をうけて、8世紀の土器について型式名称は保留する。

(2) 編年的位置

以上をまとめると下記のようになる。

①仙台市郡山遺跡第Ⅱ期官衙跡－ＳＥ429井戸跡出土土師器群に近似するものに甕ⅠＡ・ⅠＢ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類がある。Ⅱ期官衙跡は、ＳⅠ390住居跡最下層出土の須恵器蓋類と藤原宮の廃絶時期とされるＳＢ3226柱抜取穴出土のもの[16]との類似から710年前後には確実に存在したと考えられる[9]。井戸跡出土の100個体前後の甕は刷毛目調整を主体とする栗囲式に比してヘラケズリ・ミガキもみられ報文では8世紀前半としている[9]。この点では、本遺跡の甕は、刷毛目調整を特徴としている点が異なるが8世紀前半の幅でおさえられる。

②名生館遺跡C_1期土器群に類似するもの

土師器坏ⅠＡ類、須恵器甕、がありⅢ類も本住居跡の共伴関係からこの期に属する可能性がある。C_1期のＳⅠ168・175住居跡出土の日の出山窯跡[17]、木戸窯跡[18]出土のものに類似する須恵器坏から8世紀前半と推定されている[1]。

③南武蔵を中心として分布する「盤状坏」に近似するもの

土師器坏Ⅲ類は、胎土、器形の細部、非赤彩という違いから般入品でなく当地で模彷して製作した可能性が高い。南武蔵における福田健司氏の編年、相模における國平健三氏の編年では、8世紀の第1四半期直後から第2四半期の741年前後の年代が与えられている[7]。

以上の検討により本住居跡の土器群は、8世紀前半におさまることは確実であろう。又坏Ⅲ類の存在から、8世紀の初期（第1四半期の前半）は除外される可能性がある。甕以外の器種の特徴が郡山遺跡第Ⅱ期官衙跡出土土器と異なる点も注意されよう。

8世紀前半の土器群（第16図）

前述したように仙台市郡山遺跡第Ⅱ期官衙跡では土師器坏と甕などの明瞭な共伴関係を示す資料に現段階では乏しいが、8世紀前半の遺物群は、栗原群志波姫町御駒堂遺跡[2]、同築館町佐内屋敷遺跡[19]、同高清水町観音沢遺跡[8]、古川市名生館遺跡（官衙跡）[1]にみられる。ここでは**御駒堂遺跡**と比較を試みる。土師器は4群に分類され、第1群土器は7世紀末ないし8世紀初頭、第2群土器は「土師器盤状坏」の共伴から8世紀前半の年代が与えられている。

1群土器の中で20号住居跡第48図2は外面の段と対応する内面の屈曲、上部の横ナデと下部のケズリという点では同群の内部に稜をもつ、より北方の影響をうけた土器群(12号住居跡34図

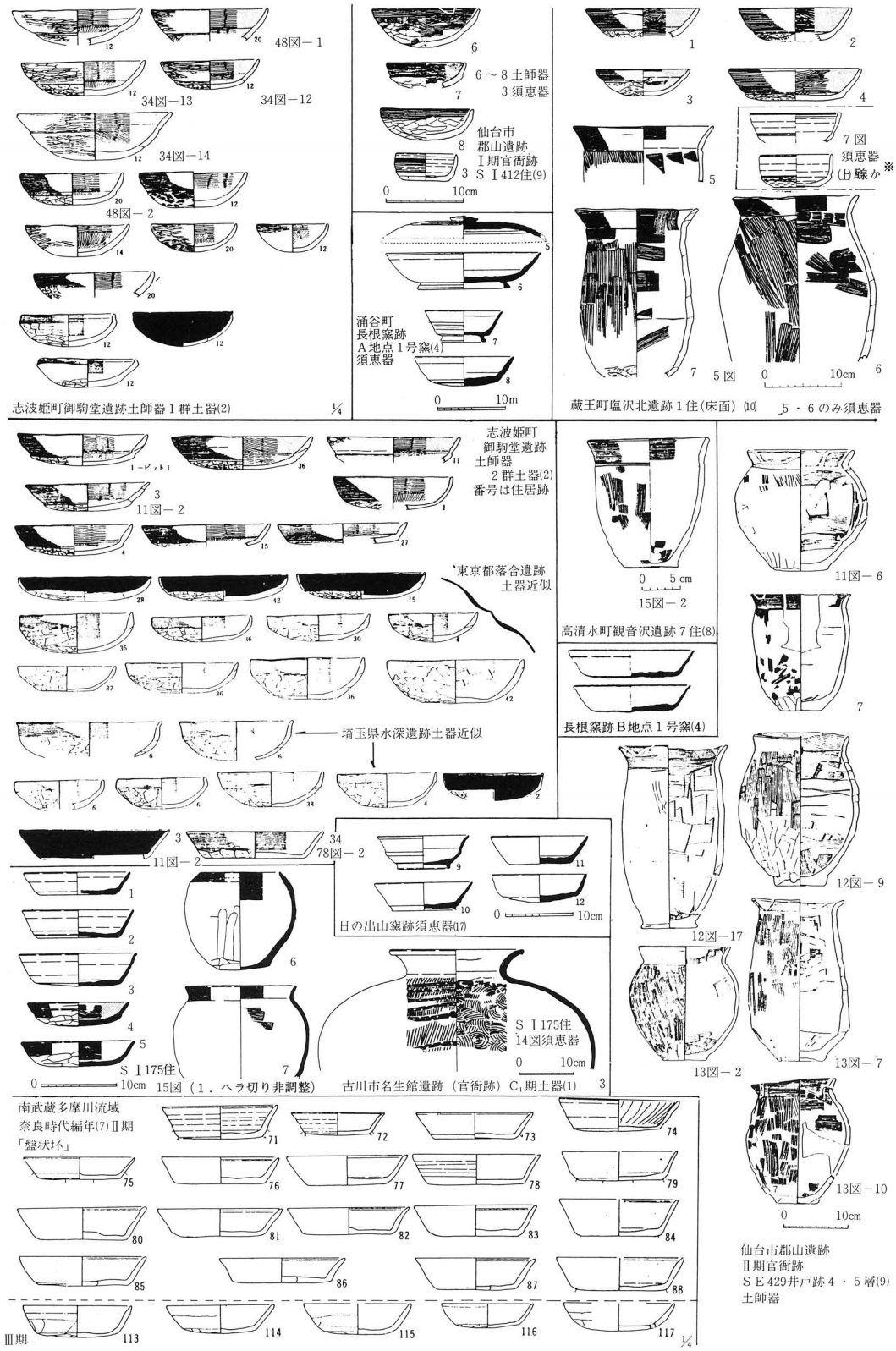
12～14）本遺跡Ⅰ類と共通するが、段から上の内弯度が強く、口径に対し器高が高いという点で異なる。２群土器の在地の坏は前者に比し段から上の内弯度が弱く口径に対する器高が低い。それは３号住居跡で盤状坏と共伴した段の上が横ナデ、下がヘラケズリの坏でも同様である。ただし本遺跡のⅠＡ類に比し外面の段は顕著である。(断面のみ図示した第17図16には、近い)このように、坏における外面調整の南北差、即ち北のヘラミガキ主体、南の横ナデ主体も相互の移入された土器を検証していくことにより８世紀初頭と以降の「前半」の土器を区別しうる。[20]

(1) 白鳥良一・仲田茂司『名生館遺跡Ⅲ』1984多賀城調査研究所
(2) 小井川和夫・小川淳一「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』1982宮城県教育委員会
(3) 手塚均「山ノ上遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』1980宮城県教育委員会
(4) 岡田茂弘・佐々木茂楨・桑原滋郎『長根窯跡群Ⅱ』涌谷町教育委員会
(5) 千葉宗久「原前南遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』1982宮城県教育委員会
(6) 滝沢亮・小金井靖他『シンポジウム盤状坏―奈良時代土器の様相―』1981東洋大学未来考古学研究会・相武古代研究会
(7)a 「シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題第Ⅱ版」『神奈川考古第14号』1983神奈川考古同人会
b 「シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題」『神奈川考古第15号』1983神奈川考古同人会
(8) 加藤道男・阿部博志「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県教育委員会
(9) 木村浩二・長島栄一他『郡山遺跡Ⅳ』1984仙台市教育委員会
(10) 小川淳一「塩沢北遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ」1980宮城県教育委員会
(11) ただし須恵器は伝世も考えられるので塩沢北遺跡１住は７世紀末～８世紀初頭の幅でとらえざるをえない。
(12) 工藤哲司『栗遺跡』1982仙台市教育委員会
(13) 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』東北史学会
(14) 伊東信雄・氏家和典『仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査概報』1968仙台市教育委員会
(15) 氏家和典「陸奥国分寺出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』1967
(16) 『飛島・藤原宮発掘調査概報12』1982奈良国立文化財研究所飛島藤原宮発掘調査部
(17) 岡田茂弘他『日の出山窯跡群」1970宮城県教育委員会
(18) 桑原滋郎・辻秀人『長根窯跡群Ⅲ』1976涌谷町教育委員会
(19) 森貢喜「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ』1983宮城県教育委員会

(20) (2)報文では２群土器の在地の土器に対して、県南の１群土器並行のものとの共通性を指摘し、県北の在地の土器と別系統の可能性を指摘している。後者は認められるが前者については、県南・県北とも１群土器併行は２群より口径に比して器高が高い傾向がみられる。

鉄製品（第17図）

１号住居跡出土の鉄製品には刀子、把鉏？、不明鉄製品各がある。刀子（①）は平棟・平造りである。鋒と茎尻が破損し茎には把木の一部が残存している。区は銹がひどく観察ができない。遺存長11.15㎝である。③は幅８㎜、厚さ0.7㎜の薄い板を環状に巻いているもので把鉏の可能性がある。長径1.9㎝、短径1.6㎝である。②は、膜状の銹を除くと輝く白色３ＰＢ⅙の物質が現われたので東北大学金属材料研究所技師清水真人氏に分析を依頼したところエネルギー分散型Ｘ線アナライザーにより鉄Ｆｅ合金でシリコンＳｉを少量含むとの御教示を頂いた。一端がやや尖っているが用途不明。これらの年代は共伴土器から８世紀前半である。



各報告書より抜粋
※丹羽茂氏御教示

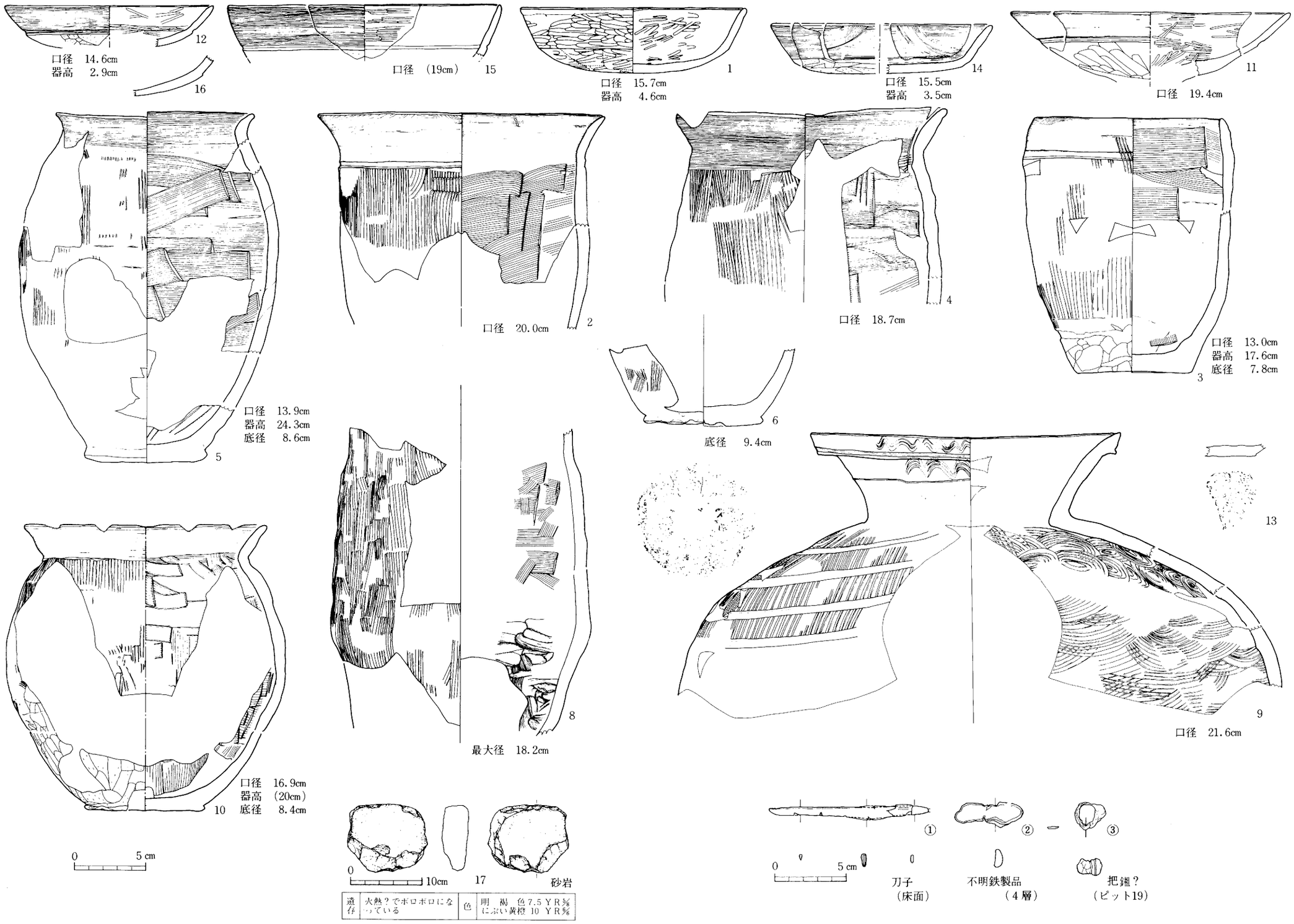
第16図　7世紀末葉から8世紀前半の土器

（但し、長根窯跡B地点出土須恵器は、中葉中心の可能性）

番号	種　類	器種	接　　合	残　　存	外　　面　　調　　整	内　　面　　調　　整	備　　考
12	土師器	坏	1住 堆2 堆3	1/5	口縁部：横ナデ 底　部：ヘラケズリ→横ナデによる沈線帯	横位ヘラミガキ（黒色処理）	火熱をうけて黒色処理が消失している部分とかなり残っている部分が接合。 積上痕あり
1	土師器	坏	堆3：Po16 (周溝確認面)	4/5	壁　：ヘラミガキ（円周に沿って横方向） 底　部：ヘラケズリ→ヘラミガキ	壁　：ヘラミガキ（斜位） 底　部：ヘラミガキ、(直線的)	底部下半は、火熱により剝落している。 火熱により内面黒色処理は消失 内外面、にぶい橙色7.5YR7/4～橙色7.5YR7/6
14	土師器	坏	床面(Po36) Pit1(掘り方) 床上(Po30) 堆3(Po17)	1/3	体部下端～底部：手持ちヘラケズリ ↓ 口縁部：横ナデ（「上がり」あり）	底部中央：ヘラミガキ(ナデ状) ↓ 口縁部～底部周縁：横ナデ	
11	土師器	高坏	P17 (Po43)	坏部の1/4	口縁部：横ナデ 底　部：ヘラケズリ→沈線帯（横ナデによる）	口縁部：ヘラミガキ（横位） 底　部：ヘラミガキ（直線的）	火熱により内面の黒色処理は消失
5	土師器	甕	堆1：Po10 堆2：Po5 ・11・12・14	胴部の一部欠損	口縁部：横ナデ 体　部：縦位刷毛目が部分的にみられるが全体としては縦位ナデに近い	口縁部：横ナデ 体　部：ヘラナデ(横位主体)	外面に積上の単位顕著(1.2～1.5cm)黒斑あり火熱をうけて剝落が激しい（片側の一部を除く）
2	土師器	甕	煙道：Po34 堆1：Po10 カマド 堆3	口縁部～胴上部3/4	胴上部：刷毛目（縦位）→口縁部：横ナデ ↘頸　部：沈線帯	口縁部：横ナデ 胴上部：ヘラナデ	片面、残存部下端が火熱により、激しく剝落し、明赤褐色5YR5/8化している。内面積上痕あり。
4	土師器	甕	堆6：Po22 堆3：Po30 堆2：Po14 堆1：Po10 Po5	口縁部～胴上部3/4	胴上部：刷毛目(縦位)→口縁部：横ナデ	口縁部：横ナデ ↓ 胴上部：ヘラナデ	内面に積上痕（幅約2cm） 片面、火熱をうけて明赤褐色2.5YR5/8化し、剝落している。
3	土師器	甕	堆3：Po30 ・32・28	口縁部と胴上部の1/2欠損	口縁部：横ナデ→体部：刷毛目(縦位)→体部下端ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ↗	口縁部：横ナデ 体　部：横位ヘラナデ	内面胴下半部：橙色（5YR6/8）に変色 内面胴上部と内面底部：黒色7.5YR3/1 外面は火熱による剝落が激しい
10	土師器	甕	床直(Po31) P10・17 堆3・床面	約1/2	体上部：刷毛目→口縁部：横ナデ ↘ヘラケズリ 底　部：ヘラケズリ	ヘラナデ→口縁部：横ナデ	全体に火熱をうけているようである。 片面は橙色(5YR6/8)、片面は明黄褐色(7/6) 底部は外方につきだしている。
8	土師器	甕	床面：Po36 煙道堆8 堆2：Po15 堆1：Po7	胴部のみ	刷毛目(縦位)：単位幅1cm前後	上　部：ヘラナデ（横位） 下　部：ナデ	積上の凹凸顕著（1.5cm前後の幅の単位） 煙道部出土片を除き火熱をうけ、暗赤褐色（2.5YR4/8）黒斑あり。
9	須恵器	甕	堆3：Po17	口縁部～胴上部1/2	口唇部：くし描き波状文（二本単位）→沈線帯 口縁部：くし描き波状文（四本単位） 胴上部：平行叩き目(木目に直交)→凹線帯	同心円文当て目	火熱により細片に分解していたものを接合 外面、口縁部内面の剝落激しい。 灰白色2.5Y7/8
16	土師器	坏	堆2・P10・11・17	胴～底部1/8	横ナデ（段の上）・ヘラケズリ（段の下）	ヘラミガキ（横位)(黒色処理）	段

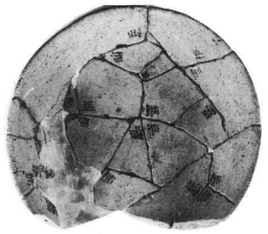
第5表　第1号住居跡土器観察表

※6は欠番　※「壁」は口縁部～体部の意　※堆：堆積土

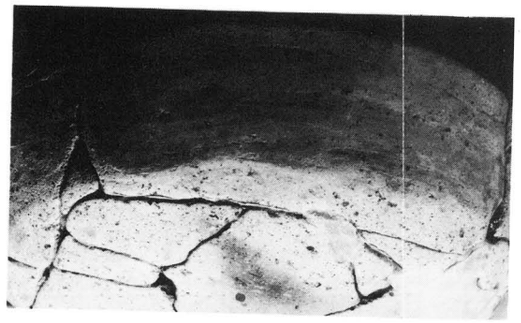


第17図　第1号住居跡出土遺物　1～6・8・10～16土師器　9・13須恵器（番号は遺物番号）

1　土師器坏



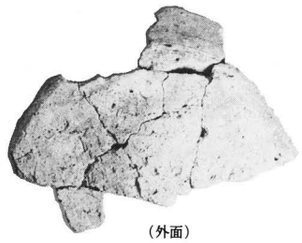
1（内面）



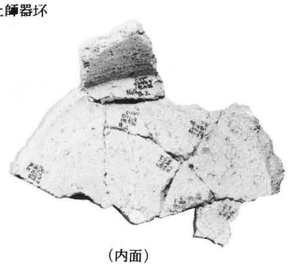
1（外面細部）

11　土師器高坏

12　土師器坏



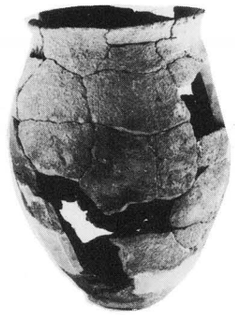
（外面）



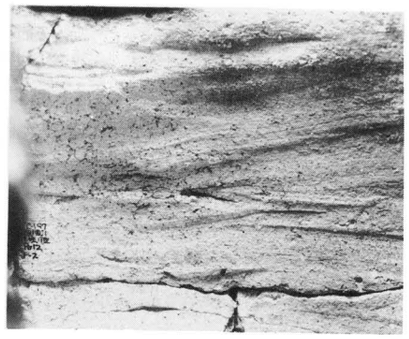
（内面）

14　土師器坏

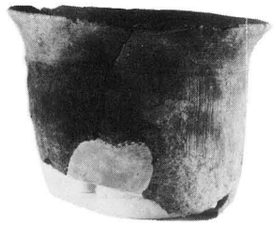
8　土師器甕



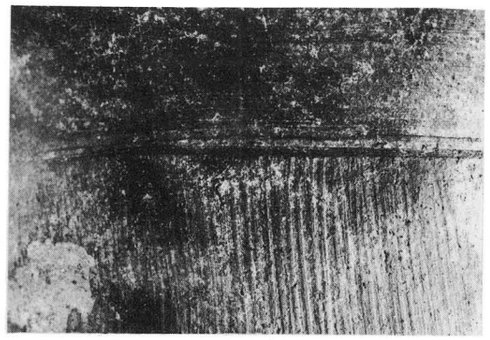
5　土師器甕



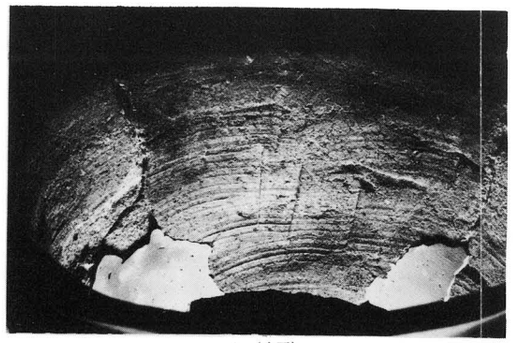
5　内面（胴上部）



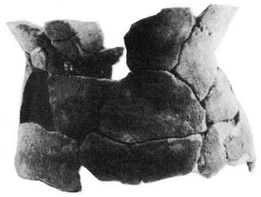
2　土師器甕



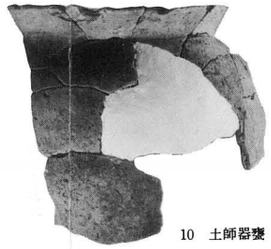
2　頸部(外面)



2（内面）

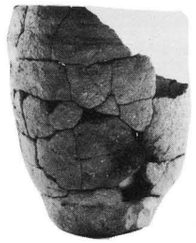


4　土師器甕

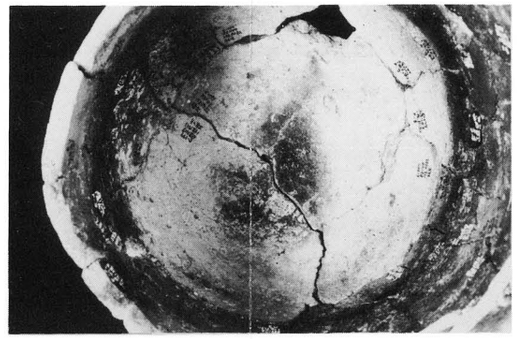


10　土師器甕

9　須恵器甕

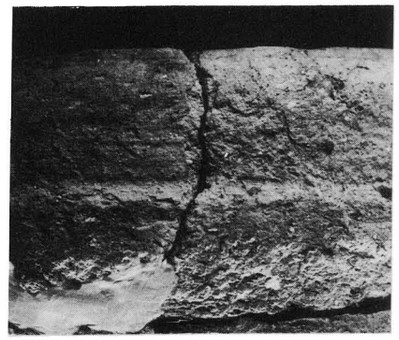


3　土師器甕(鉢型)



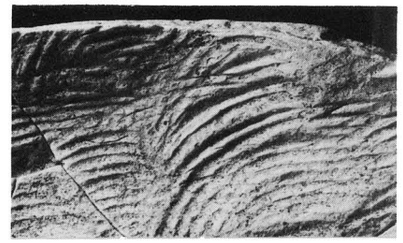
3　内面の煮沸痕

9　口　縁　部



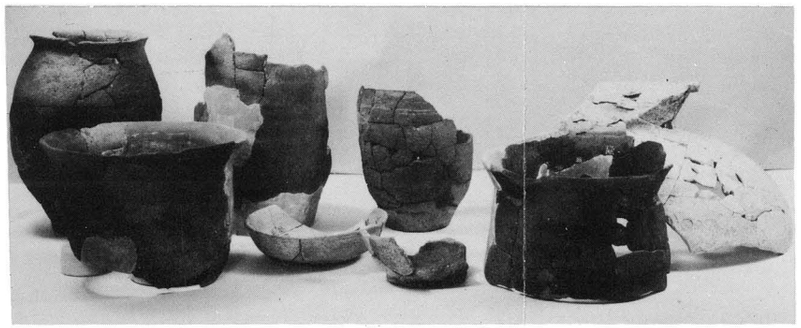
3　口　縁　部

13　須恵器坏底部



9　内面当て目(残存下部)

9　内面当て目(上半部)



主　要　復　元　土　器

17　砥石の可能性ある石

①a　刀子

①b

③把鎚？

④不明鉄製品

②不明鉄製品(外面銹排除)

写真5　第1号住居跡出土遺物　番号は遺物番号

実測土器番号 / 出土位置	1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	14	15	16
ピット1(柱穴掘り方)													●		
煙道底面		●					●								
床面						●							●		
床面直上			●						●						○
カマド(6は東側壁)		●				●									
堆積土8層															
堆積土7層												●		○	
堆積土6層上面				●											
周溝堆積土							●	●							
周溝確認面	●								●						
ピット1(柱穴確認面)			●												
ピット10堆積土2層									●						
ピット11堆積土														○	
ピット16確認面									●						
ピット17堆積土									●					○	
ピット17確認面							●	●		●					
ピット19堆積土											●				
堆積土3層	●	●	●	●			●		●		●		●		
堆積土2層		●		●	●		●		●		●	●		○	
堆積土1層		●			●		●		●			●	●		
第5号溝堆積土					●										

● 接合
○ 一個体

A. 1号住居跡出土土器接合等関係表

種類	土師器																					合計
器形	坏			甕																	不明	
部位	底部			口縁部		口~頸	頸部			胴部											口縁部	
外面	ミガキ	ミガキ	不明	横ナデ	横ナデ	ヨコナデ刷毛目	ヨコナデ刷毛目	ヨコナデ刷毛目	ヨコナデ刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	不明	不明	ケズリ	ミガキ	ケズリ	ケズリハケメ	不明	不明	
内面	ミガキ黒	不明	不明	横ナデ	不明	ヨコナデヘラナデ	ヨコナデヘラナデ	ヨコナデヘラ ハケメナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ナデ	ハケメ	不明	ヘラナデ	ナデ	ミガキ	不明	ナデ	ヘラナデ	不明	不明	
床面										1												1
a区床直				1																		1
床面+床直(3層)		1		1						1		5				1		1				10
煙道堆積土					1		2			1												4
カマド				1						2											1	4
a区周溝堆積土				1						2				1								4
周溝堆積土										1								1		2		4
a区 堆-2層										2				2	1							5
〃 堆-1層										1											1	2
b区 堆-1層										1			1						1			3
d区 堆-2層						1	1	1														2
堆-1層										1												1
堆-3層				1						3				1						1		6
堆-2b層										1			1									2
堆-2層									1	14									1		1	17
堆-1~2層										1												1
堆-1層										1												1
堆-1層中																				1	1	2
ピット-1										1												1
ピット-10								1		5	3						1					10
ピット-11	1																					1
ピット-17			1	1																		2
合計	1	1	1	6	1	1	3	2	1	39	3	5	2	4	1	1	1	2	2	4	4	85

堆:堆積土

B. 1号住居跡土器破片集計表

種類	土師器													赤焼土器			須恵器			土製品	合計
器形	坏				甕							不明		坏			蓋	甕			
部位	口縁部		口~底	底部	頸部		底部	胴部				底部	胴部	口縁部	口~底	底部		胴部			
外面	横ナデ	横ナデ	手持ケズリ	手持ケズリ	横ナデ	横ナデ	不明	ケズリ	刷毛目	不明	不明	不明	不明	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切り	回転ヘラケズリ	平行叩き目	ロクロナデ	ミガキ	
内面	ミガキ	不明	ミガキ	ミガキ黒	横ナデ	刷毛目	ナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	不明	不明	不明	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	ロクロナデ	ナデ	不明		
8層					1				1								1				3
8層下部					1	1		1													3
7層	1								1												2
7層上面	1			1						1	2			1							6
5層		1	1				1					1	1		1						6
4層																1		1			コ
3層																			1	1	コ
3層上面																1					1
合計	2	1	1	1	2	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	1	25

※須恵器の蓋は8層、5号溝より出土のそれと同一個体

C. 第3層~8層土器破片集計表

種類	土師器												須恵器	合計
器形	坏		甕							高台坏		不明	蓋	
部位	口~底	底部	口縁部	頸部	胴部					底部		底部		
外面	横ナデ手持ケズリ	不明	横ナデ	横ナデ	ケズリ	刷毛目	刷毛目	ミガキ	不明	ナデ	ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
内面	ミガキ	ミガキ黒	横ナデ	横ナデ ナデ	ナデ	ヘラナデ	刷毛目	ヘラナデ	不明	不明	ナデ	不明	ロクロナデ	
5号溝						1								1
堆-5層	1			1	1	3	2	1					1	10
確認面			1											1
7層上面・大畦									2					2
5層上面~5層 ピット4										1				1
ピット5		1												1
5層上面 ピット12											1			1
ピット7												1		1
合計	1	1	1	1	1	4	2	1	2	1	1	1	1	18

※8層5号溝堆-1.2層堆積土出土の須恵器蓋は、8層出土のそれと同一個体

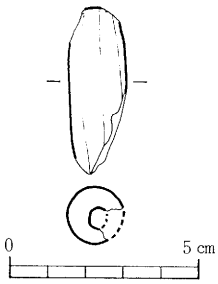
第5層上面から7層上面検出遺構土器破片集計表

第6表 土器集計表(第3層~第8層) (3×3cm以上の土器片)

5．平安時代の水田跡

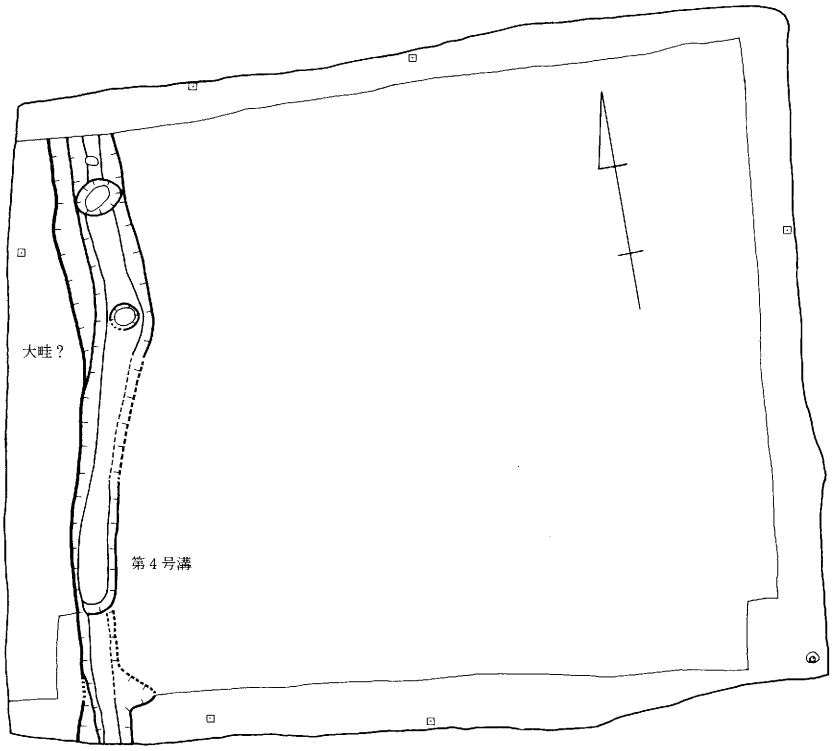
Ⅰ．6層上面で検出。6層は断面観察から作土と考えられる。調査区の西端に東西に大畦もしくは、非水田との境があり、この東側に沿うように7層上面で検出した幅50～70cm深さ4cm前後の溝状の落込（第4号溝）がある。灰白色火山灰が多量に混入している。第7層は酸化鉄斑を多量に含む床土で、本水田跡が、山口遺跡[1]、泉崎前遺跡[2][3]、中谷地遺跡[2]と異なり、乾田であることを示している。遺物は、作土中より土器細片が6点出土しており、その内器種のわかるものは、赤焼土器坏細片と内黒土師器坏細片、土師器甕細片である。耕作土中には、灰白色火山灰を含まず、床土上面で検出された溝状落込に、多量の灰白色火山灰がまじることから、意識的に火山灰を落込内に排除し耕作を続けた可能性がある。年代は灰白色火山灰が10世紀前葉と考えられていることと、赤焼土器坏の特徴から平安時代における10世紀前葉以降と考えられ、上層（3～5層）の平安時代の水田跡より遡る年代が考えられる。

Ⅱ．3層が作土で4層は酸化鉄集積層が攪乱された様相を呈しある時期の床土が耕作などで攪乱されたと思われる。5層は灰黄褐色シルトであるが、マンガン集積層かと考えられる。調査区西端の平安時代水田跡の大畦もしくは水田との境とほぼ同位置に5層上面から立ちあがる大畦、もしくは水田との境が検出された。5層上面でこれに沿うように南北に走る溝が確認された。(当初1、3号溝に分離したが、断面観察で同一と判断した。) 又、5層上面から上部にかけて多数のピットが検出されたが凹凸の多い断面形を呈し畦？下にも同一の様相で分布しているので水田跡とは直接の関連はないと思われる。遺物は5層上面から土器細片が34点出土している。種類の明確なものは土師器11点、赤焼土器17点である。赤焼土器は回転糸切り無調整で底径が小さい特徴をもつ。灰白色火山灰の上層に位置することから少くとも、10世紀前葉以降のものである。なお、水田跡に直接伴わない遺物として、3層より土錘1点が出土している。(第18図) 一端は欠損しているが形態は中ぶくらみの管状形を呈している。器面調整はオサエの後粗いヘラミガキがされているが、磨滅のため単位は不明である。径1・5cmで貫通孔径0.5cmである。周辺の出土例としては、下ノ内浦遺跡[4]で6点出土しているが、これらに形態は近似し、やや大ぶりと推定される。赤焼土器片の出土量の多さなどから平安時代に限定される可能性が高い。下層の灰白色火山灰を伴う水田との関係から平安時代後半の可能性を考え、今後の調査成果を待って検証していくことにする。上下層の同一位置に畦が重複する例としては、西方300mに位置する泉崎浦遺跡[2]がある。。

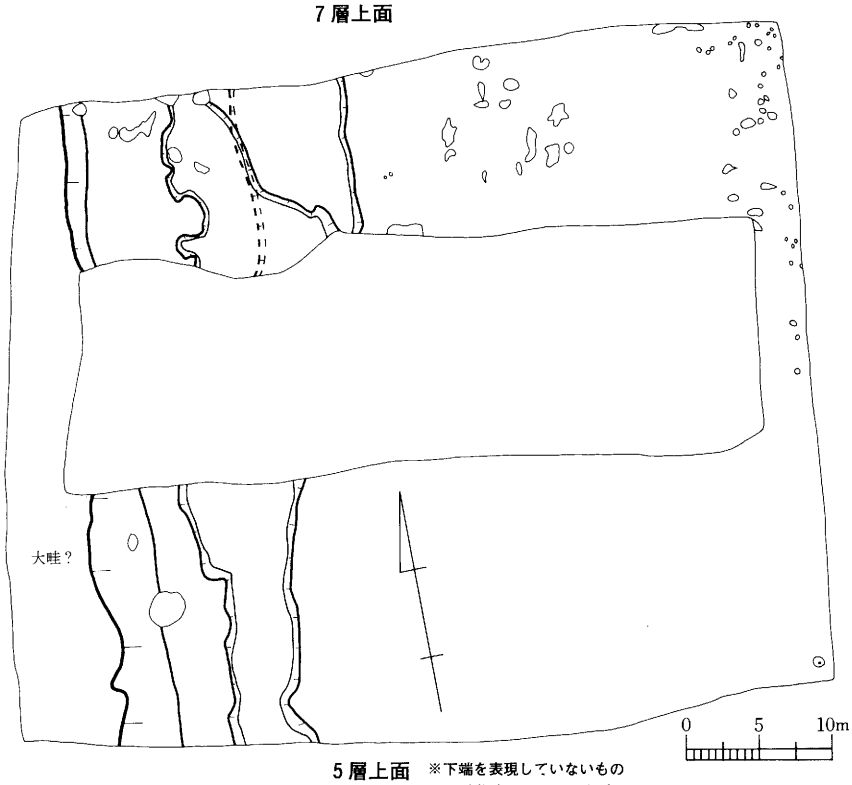


第18図　土錘

註(1)　田中則和・主浜光朗他『山口遺跡Ⅱ』1984仙台市教育委員会
(2)　篠原信彦他『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』1983
(3)　工藤哲司他『富沢水田遺跡第1冊』1984仙台市教育委員会
(4)　工藤哲司他『下ノ内浦遺跡』1984仙台市教育委員会



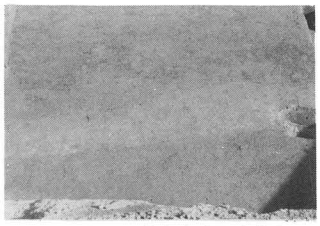
7層上面



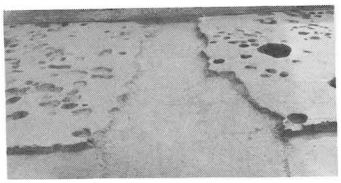
5層上面　※下端を表現していないものは植物痕と思われる小ピット群

第19図　平安時代の水田跡

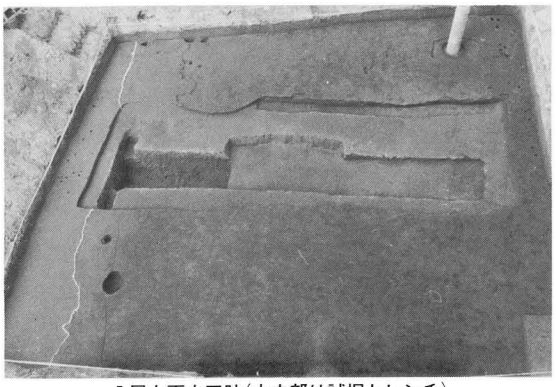
7 層上面水田跡(東から)



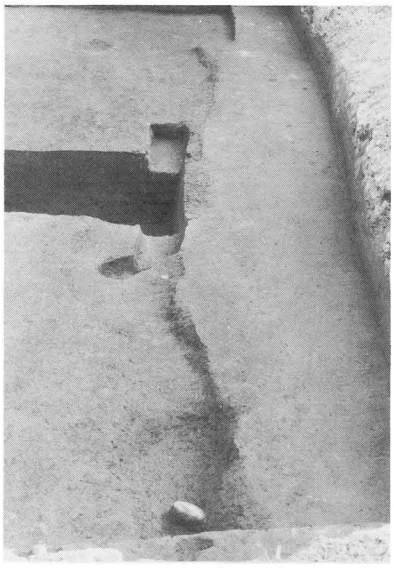
7 層上面灰白色火山灰を含む
溝状落込確認状況



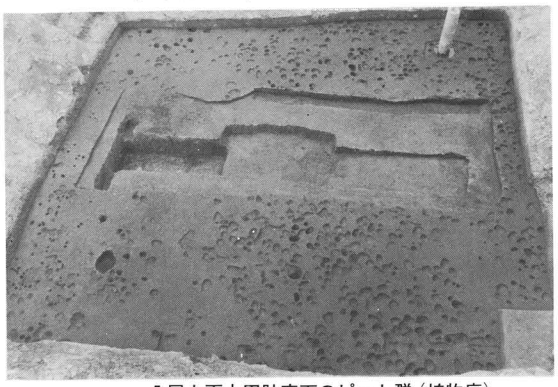
5 層上面 3 号溝



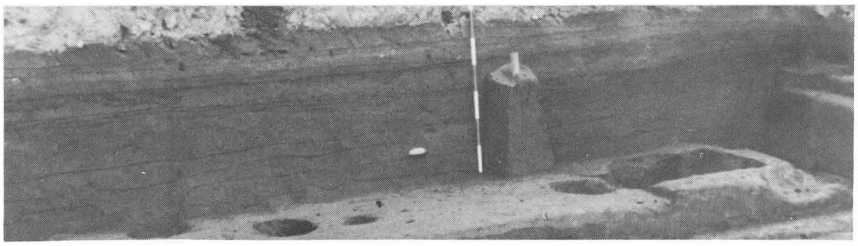
5 層上面水田跡(中央部は試掘トレンチ)



7 層上面畦 ? (北から)

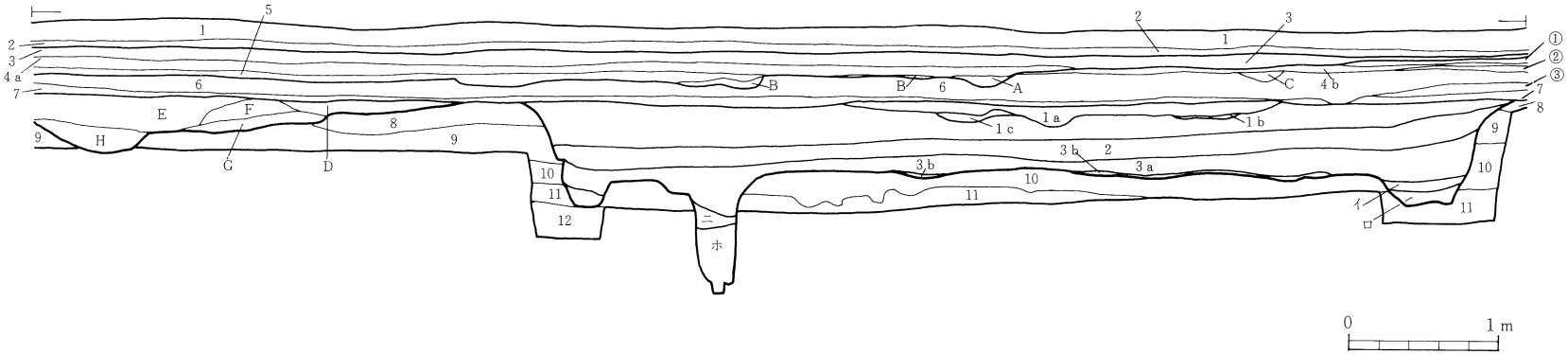


5 層上面水田跡直下のピット群 (植物痕)



トレンチ南壁断面(北から)

写真 6　平安時代の水田跡



水田跡

	層位	土色	土性	備考	時代
水田跡	第1層	灰オリーブ色 7.5Y 5/1.5	シルト	現代水田耕作土	近現代
	第2層	浅黄橙色 7.5Y 6/7	シルト	現代水田床土	
水田跡Ⅱ	第3層	灰オリーブ色 7.5Y 5/1.5	シルト	酸化斑薄く入る。南側に酸化鉄集積層あり。ある時期の床土。	平安時代?
	第4層	浅黄橙色 7.5Y 6/7	シルト	灰オリーブ色(7.5Y 5/1)シルトが境不鮮明に入る。2層より薄い。	
	第5層	灰黄褐色 10YR 4/2	シルト	2～3mmの酸化斑入る。マンガン集積層か。	
	第①層	黒褐色 10YR 2/3	粘土質シルト	畦? 2層よりやや暗い。	
	第②層	にぶい黄褐色 10YR 4/3.5	シルト	酸化斑を含む。	
	A層	灰黄褐色 10YR 4/2	シルト	2～3mmの酸化鉄斑入る。マンガン集積層か。	
水田跡Ⅰ	第6層	灰黄褐色 10YR 4.5/2	シルト	酸化鉄斑を境不鮮明に含む。	平安時代
	第7層	黄褐色 10YR 5/6 シルト 暗褐色 7.5YR 3/3 シルト(マンガン)		境不鮮明に混じりあう。	
	第③層	にぶい黄褐色 10YR 4/3	シルト		

基本層位

層位	土色	土性	備考
第8層	暗褐色 10YR 3/3	シルト	上面は奈良時代住居跡の確認面
第9層	にぶい黄褐色 10YR 5/3.5	シルト	
第10層	暗褐色 10YR 3/3	シルト	
第11層	黒褐色 10YR 3/2	粘土質シルト	

1号住居跡堆積土

層位	土色	土性	備考
1a層	にぶい黄褐色 10YR 4.5/3	シルト	
1b層	暗褐色 10YR 3/2.5	粘土質シルト	
1c層	にぶい黄色 2.5Y 6/4	シルト	暗灰黄色(10YR 4.5/2)を斑点状に含む。
1d層	にぶい黄褐色 10YR 4/3	シルト	微量の炭化物を含む。
2層	暗褐色 10YR 3/4	シルト	炭化物を含む。
3a層	褐色 10YR 4/4	シルト	黄褐色の砂、部分的に焼土を斑点状に含む。
3b層	にぶい黄褐色 10YR 5/4	シルト質砂	
イ層	灰黄褐色 10YR 5/2	粘土質シルト	
ロ層	暗褐色 10YR 3.5/2	粘土質シルト	
ハ層	灰黄褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	
ニ層	暗褐色 10YR 3/2.5	粘土質シルト	
ホ層	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	ピット34堆積土

その他

層位	土色	土性	備考
B層	灰黄褐色 10YR 4/2	シルト	5層を斑点状に含む。
C層	灰黄褐色 10YR 4/2	シルト	
D層	褐色 10YR 4.5/4	シルト	
E層	暗褐色 10YR 3/3	シルト	上面は奈良時代住居跡の確認面
F層	にぶい黄橙色 10YR 6.5/4	シルト	
G層	黒褐色 10YR 2/3	粘土質シルト	
H層	にぶい黄橙色 10YR 6/3.5	シルト	

第20図　平安時代の水田跡竿断面　1号住居跡断面を含む

6．六反田遺跡出土植物遺体鑑定

東北大学農学部　　星　川　清　親

① 1号住居跡ピット10堆積土（奈良時代、焼土炭化物を多量に含む）

炭化した（消炭状で、焼けたものと思われる）木、枝片多数の中に、玄米炭化物（焼けてはいない）3ヶが見出された（写真1，2）。他に種不明だが、米粒の縦径と同じくらいのほぼ球形の植物種子らしきもの2ヶあり、うち1ヶはやや大（写真3）。

② ①に同じ

炭化木片多い。その中に炭化玄米7ヶ、他に玄米らしきもの3ヶ（写真4～7）。ダイズと思われる大きい炭化球体（長径11.0mm）1ヶあり（写真8，9）。

③ ①，②と同じ

炭化木小片多数と玄米1ヶ（写真10，11）。リョクトウと思われる（あるいはヤブツルアズキか？）種子の半分1ヶ（写真12）。豆状のもの（種不明）（写真13）あり。

④ ①～③と同じ

小木片多数。玄米炭化物1ヶあり（写真14）。

⑤ ①～④と同じ

玄米一粒（写真16）、径10.5mmに及ぶ球形のもの（種不明）数ヶあり（写真17～19）。

⑥ ①～⑤に同じ

炭化木小片多数。玄米2ヶ（写真20）。リョクトウ（又はヤブツルアズキ、アズキの可能性もあり）1ヶあり。

⑦ 第5層（基本層）（水田跡Ⅱ）

ケイヌビエ種子2ヶ。炭化していない。新しいものか？　スゲ（種不明）炭化していないもの2ヶ。うち1ヶは標本として採取後に発芽している。すなわち種子が生きていたところからみて新しい現代植物の混入したものかと思われる。

⑧ ⑦と同じ

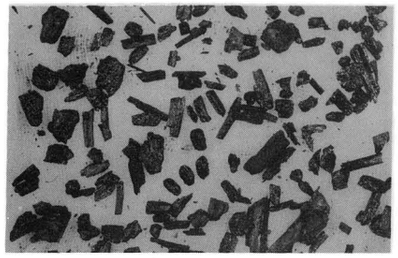
微小木片炭化物のみ。

⑨ 第3層（基本層）平安時代水田跡作土（水田跡Ⅱ）

イヌビエまたはケイヌビエ種子。炭化していない。新しいものである（写真21）。スゲ（？）1ヶまたキク科の種子（種不明）1ヶが発芽していた。

⑩ 第8層（基本層）

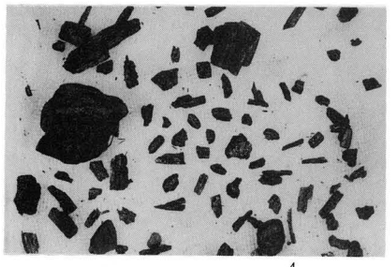
イネ科植物の根の一部（種不明）。



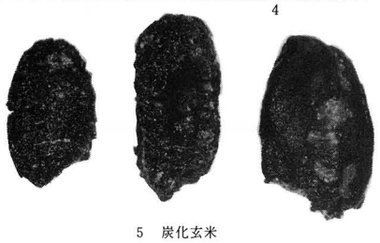
1

2　1の中央部に見られる玄米の拡大　日本型イネ

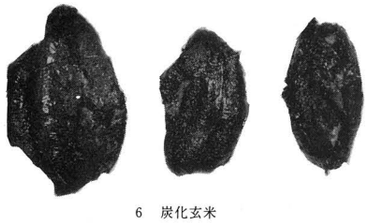
3　マメ(リョクトウ?)ではないかと思われる炭化物



4



5　炭化玄米

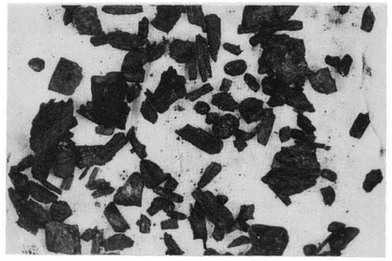


6　炭化玄米

7　イネ玄米

8

9　8の拡大　ダイズか?



10

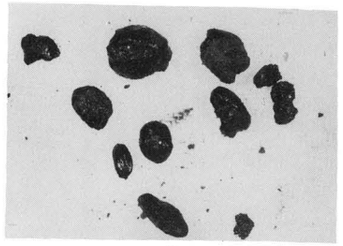
11　玄　米

12　リョクトウ(?)

13　種不明　マメか?

14　玄　米

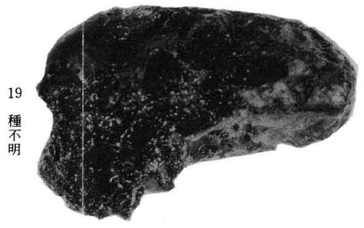
16　玄米



15

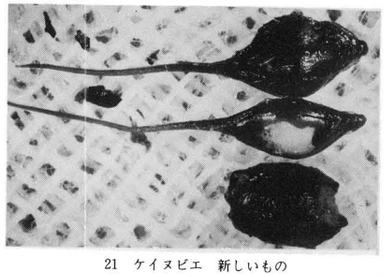
18　種不明

17　種不明



19　種不明

20　玄　米



21　ケイヌビエ　新しいもの

写真7　植物遺体

7．検討課題――1号住居跡出土須恵器坏について

1号住居跡№13須恵器坏は平底を呈し回転ヘラ切り離し後、無調整である。8世紀前半にこの種の坏が共伴する例として名生館遺跡ＳＩ175住居跡で日の出山窯跡出土坏と類似する坏との共伴例がある[(1)](第16図参照)。又、色麻古墳群205号墳では「供献土器」という資料的限界をもつが、共伴土器から「多賀城創建を下限とする7世紀末から8世紀初頭」の年代が指摘されている。[①] この中で本遺跡例は、底部の内面屈曲（体部との境）が、外面屈曲より外方にあると思われる点で名生館遺跡例に近似している。これらは統計処理するには類例に乏しいが器高3cm台、口径14～15cmに対し底径10cm前後（口径：底径が名生館遺跡例が1：0.69、色麻古墳例が1：0.72である。）であり8世紀後半とされる糖塚遺跡12号住居跡のヘラ切り無調整の坏[②](器高4cm台が多く口径：底径の比が1：0.5～0.6）と異なる器形・法量を示している。さて従来窯跡出土のもので8世紀後半から末とされてきたものに長根窯跡Ｂ地点1号窯出土坏がある。[(4)] 報告例は2点で器高は共に3.4cm、口径は1が15.5cm、2は14.4cmで底径は各々10.0cmと9.3cmであり、糖塚遺跡12住出土のもの(以下Ｂ類)より名生館遺跡75住出土のもの（以下Ａ類）に近いが口径：底径の比は中間的様相を示している。

次にこれらの前段階の土器をみると7世紀中・後葉とされる清水遺跡第Ⅴ群土器に属しＡ溝2層より底部外面が回転ヘラケズリの坏とともに出土したヘラ切無調整の坏がある。「回転ヘラ切りによる段が二、三段あり、底部中央は平担であるが全体としては丸底状」[③] で器高2.4cm口径12.9cm、底径10.0cm（以上報文図版より計測）で口径に対する底径比が1：0.78である。このようにみてくると県内においてヘラ切り離しで再調整のない須恵器坏は、7世紀中・後葉から集落跡で出土し（清水遺跡）→8世紀前半（Ａ類：名生館遺跡175住）→8世紀後半（Ｂ類：糖塚遺跡12住）としだいに器高、口径に対する底径比が増していく傾向にある。又7世紀末葉から8世紀前半にかけて丸底から平底への変化が、以上の諸例に加え福島県小倉寺高畑窯出土例との比較から考えられ長根窯跡Ａ地点出土例は8世紀初頭、Ｂ地点出土例は中葉中心の年代に位置づけられる可能性がある。[⑤] 又、Ａ類は同期の再調整のある坏に比して少量である。

なお南武蔵における土師器「盤状坏」は、ほぼ同時期の須恵器坏（Ｍ1窯式）との酷似が指摘されている[(6)(7)]が、宮城県内において比較的近似するものは、このヘラ切り非調整Ａ類である。但し南武蔵のものは口径17cm前後の規画性を特徴とする点でやや異なる。又、静止糸切離しで底部を回転ヘラ削りするものは日の出Ａ地点窯出土のものにみられるがその器形・法量は前者より更に異なることを指摘しておきたい。以上今後の資料の増加を待って検討していきたい。

註（)の番号は37ページの註番号に相当する。
① 古川一明「色麻古墳群」『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和57年度）』1983宮城県教育委員会
② 小井川和夫他「糖塚遺跡」『宮城県文化財調査報告書』1978宮城県教育委員会
③ 丹羽茂他「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』1981宮城県教育委員会
④ 工藤雅樹「福島市小倉寺高畑遺跡」『福島市の文化財、福島市文化財調査報告書第7集』1969福島市教育委員会
工藤雅樹・桑原磁郎「東北地方における古代土器生産の展開」『考古学雑誌57巻3号』1972日本考古学会

⑤　名生館遺跡175住例、長根窯跡B地点出土例は口縁部から体部が直線的外傾を示す特徴をもつが8世紀後半に大別される佐内屋敷9号住居跡[19]では、法量は前者に近似するが口縁部から体部は内弯ぎみに変化している。

補註

須恵器坏ヘラ切り無調整A類は、未だ類例に乏しいが口径14～15cm、底径10cm前後、器高3cm台、口径対底径の比1：0.7前後で口縁部から体部が直線的外傾を呈する。体部と底部の外面の境はB類に比して不明瞭なものを含むものである。これらは前述のように名生館遺跡SI175住居跡で日の出山窯跡出土坏に類似するものとの共伴例があるがその年代的下限については田尻町天狗堂遺跡[1]9号住居跡で平底、外面ヘラミガキの土師器が共伴しているところから8世紀後半にまで存在していた可能性もある。但し、共伴関係は明確ではなく、糖塚遺跡12号住居跡のように糖塚遺跡の8世紀後半の土器群には、A類近似のものはない。

以上からA類の使用年代は8世紀の初頭から中葉中心（8世紀第1～3四半期）の幅でおさえておきたい。又この中でも編年的に細分される可能性があり長根窯跡B地点出土坏はA類に属しかつ、後出的傾向があるが、現段階では仮説の域を出ず、今後、良好な資料の増加を待って検討してゆきたい。

註(1)　手塚均『天狗堂遺跡』1978田尻町教育委員会

(2)　本文の清水遺跡V群土器、色麻古墳群のヘラ切り無調整坏の存在について各々丹羽茂氏、小井川和夫氏より御教示を頂いた。

古代史年表

時代	西暦	年号	日本の主なできごと	陸奥国関係古代史
	694	8	12月　藤原京に都を遷す	
	701	大宝 1	8月　大宝律令なる	
	702	2		○陸奥国で戸籍を作成する
	708	和銅 1		9月　出羽都を置く　この年の陸奥国戸口損益帳現存
	709	2		3月　陸奥国鎮東将軍に巨勢麻呂，征越後蝦夷将軍佐伯石湯らを派遣し蝦夷を討つ
	710	和銅 3	3月　平城京に都を遷す	
	712	5		9月　出羽国を置く
	712	5		10月　陸奥国管内の最上・置賜二郡を出羽国に移す
	713	6		12月　陸奥国に丹取郡を建てる
	715	霊亀 1	里制を改め，郷里制とする	5月　相模，上総，常陸，上野，武蔵，下野の富民一千戸を陸奥国に配する
	715	1		10月　陸奥国香河村，閉村に郡家を建てる
	718	養老 2		5月　陸奥国から石城，石背の二国を分置する
	720	4		9月　陸奥国の蝦夷反乱し，按察使上毛野廣人を殺す。持節征夷将軍多治比縣守らを派遣する
	721	5		10月　柴田郡の二郷をさき苅田郡を置く
	722	6	閏4月　墾田百万町歩の開墾を計画する	8月　諸国より柵戸一千人を陸奥鎮所に配する
奈良時代	724	神亀 1		3月　陸奥国の海道蝦夷反し，大掾佐伯兒屋麻呂を殺す
	724	1		4月　海道蝦夷を征するため，持節大将軍藤原宇合らを派遣する
				※　多賀城碑によればこの年に多賀城を置く
	728	5		4月　新たに白河軍団を置き，丹取軍団を改めて玉作軍団となす
	730	天平 2		1月　陸奥国の田夷村に郡家を建て，百姓となす
	737	9		1～4月　陸奥按察使大野東人の請により，多賀城から出羽柵への直路を開くことを実施する。持節大使兵部卿藤原麻呂らを派遣する
	741	13	2月　国分寺創建の詔	
	749	天平勝宝 1		1月　陸奥国小田郡より初めて黄金を貢ずる
	760	天平宝字 4		12月　雄勝城，桃生柵の造営終る
	767	神護景雲 1		10月　伊治城の造営終る
	769	3		6月　陸奥国に栗原郡を置く，もと伊治城なり
	774	宝亀 5		7月　陸奥国の海道蝦夷，桃生城を侵し，その西郭を敗る

「幻の城柵郡山展」パンフレットより

職　員　録

社会教育課

課長	永野昌一	
主幹	早坂春一	

文化財管理係

係長	大沢隆夫	
主事	岩沢克輔	
〃	山口　宏	

文化財調査係

係長	佐藤　隆	
教諭	渡辺忠彦	
〃	佐藤　裕	
主事	田中則和	
〃	結城慎一	
〃	成瀬　茂	
〃	菅原和夫	
教諭	青沼一民	
主事	柳沢みどり	
〃	木村浩二	
〃	篠原信彦	
〃	佐藤　洋	
〃	金森安孝	
〃	佐藤甲二	
〃	吉岡恭平	
〃	工藤哲司	
〃	渡部弘美	
教諭	渡辺　誠	
主事	主浜光朗	
〃	斎野裕彦	
〃	長島栄一	
〃	荒井　格	
派遣職員	高橋勝也	

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横沢穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和53年3月）
第22集　経ヶ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ―昭和55年度発掘調査概報―（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報―（昭和57年3月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年3月）
第41集　年報3（昭和57年3月）
第42集　郡山遺跡―宅地造成に伴う緊急発掘調査―（昭和57年3月）
第43集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和57年8月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭―茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書―（昭和58年3月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ―昭和57年度発掘調査概報―（昭和58年3月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ―昭和57年度発掘調査報告書―（昭和58年3月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年3月）
第50集　岩切・畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
第52集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
第53集　中田・畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第55集　南小泉遺跡―青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年3月）

第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡（昭和58年３月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年３月）
第60集　南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書－（昭和58年３月）
第61集　山口遺跡Ⅱ－仙台市体育館予定地－（昭和59年２月）
第62集　燕沢遺跡（昭和59年３月）
第63集　史跡陸奥国分寺跡－昭和58年度環境整備予備調査概報－（昭和59年３月）
第64集　郡山遺跡Ⅳ－昭和58年度発掘調査概報－（昭和59年３月）
第65集　仙台平野の遺跡群Ⅲ－昭和58年度発掘調査報告書－（昭和59年３月）
第66集　年報５（昭和59年３月）
第67集　富沢水田遺跡第一冊－病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書－（昭和59年３月）
第68集　南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第３次調査報告書－（昭和59年３月）
第69集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ（昭和59年３月）
第70集　戸ノ内遺跡発掘調査報告書（昭和59年３月）
第71集　後河原遺跡（昭和59年３月）

仙台市文化財調査報告書第72集

六反田遺跡Ⅱ

昭和59年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社 共新精版印刷
仙台市日の出町２－４－２
ＴＥＬ３６－７１８１